

学校資料を 残す・伝える

- 小中学校・高校に残る地域資料の世界 -



SCHOOL Archives



高知県の学校資料を考える会編

学校資料を

残す・伝える

「小中学校・高校に残る地域資料の世界」



刊行に寄せて

過去を知ることは、今を確認することであり、未来を考えることに連なります。そして、過去を知るためには、先人達が遺した資料（史料）が不可欠であり、それは、問題意識のあり方によって、際限なき広がりを持ちます。出土品・文書・民具などの物質的資料は勿論、言語・音楽・習慣・伝承などの精神的遺物も重要な歴史資料なのです。

本書が対象とする学校資料の場合、校長室や事務室で管理される公文書に限らず、校舎・校庭遊具・写真・文集・壁新聞・献立表・試験問題・賞状・トロフィー・運動会道具・実験道具・図画工作作品・レコード等々、その全てが学校教育や地域の時代変遷を読み解くための貴重な資料です。

高知県では今、行政の広域化や児童・生徒減などによって、学校の統廃合が進み、休廃校が急増しています。その際、学校の資料整理が行われ、多くの資料が廃棄されたという話をよく耳にします。

本書は、教職員や教育委員会、学校関係者、さらには地域の皆さんに向けて、学校や地域に残された学校資料、その意義と魅力、利活用の可能性を伝えるべく企画されました。

第1章「学校資料って何だろう？」では、学校資料に関する基礎知識や高知に残された資料の特徴などをまとめ、第2章「高知県の学校資料集」では、現役の教職員や博物館の学芸員、大学教員ら19人が、県内の小中学校・高校に残った資料に触れる中で感じた学校資料の魅力をそれぞれの視点で述べています。第3章「学校資料を残す・伝える」では、閉校時の学校資料がほぼそのまま残る土佐清水市の大津小資料の概要、資料を残す際の管理規程や資料の種類・分類の課題について整理し、県内で行われている資料の整理保存、活用の実践例を紹介しました。

近年、廃校舎の利活用は注目されますが、校舎に蓄積された資料への注目度は決して高いとは言えません。本書が、今後の学校資料の保存と継承活動、あるいは教育や地域史研究などの現場で参照、活用されることを期待しています。

目次

刊行に寄せて 1

第1章 学校資料って何だろう? 4~7

第2章 高知県の学校資料集 8~61

資料集の見方【8】、学校沿革史【9】、校歌【10】、学校要覧【11】、学校経営【12】

危機管理（防災）【13】、学校日誌【14】、学校通信【15】、児童会・生徒会【16】

部活動【17】、国語【18】、理科【19】、社会（郷土史）【20】、音楽【21】

特別支援教育【22】、へき地・複式教育【23】、試験問題【24】、児童作品【25】

防災マップ【26】、文集【27】、読書【28】、家庭（母親）【29】、家庭（父親）【30】

学籍【31】、副読本【32】、運動会【33】、マラソン大会【34】、夏休み【35】

水泳【36】、保健【37】、テレビ【38】、教職員【39】、履歴書【40】、出勤簿【41】

施設・備品【42】、模型【43】、標本【44】、給食【45】、予算【46】、PTA【47】

校友会【48】、学校OB【49】、老人会【50】、保育【51】、校長会・教頭会【52】

補導【53】、学校生協【54】、行事写真【55】、集合写真【56】、閉校（記念誌）【57】

掲示物【58】、国旗・国歌【59】、地域（観光）【60】、古文書【61】

第3章 学校資料を残す・伝える 62~70

学校資料の残り方 62~64

残らない？残せない？学校資料～管理規程からみた資料保存～ 65~67

どのように整理・保管する？ 68~69

学校資料の活用～空き教室やフリースペースを使って「ミニ学校博物館」に～ 70

註・参考文献 71

執筆者一覧 73



大津小資料のリスト作りの様子

高知県の 学校資料を考える会

全国で学校資料の保存活用が提起されるようになり、「高知でも保存の機運を高めよう」と県内の30~40代の学校事務職員や学芸員らが2019年8月に結成した団体です。同年12月には高知城歴史博物館でシンポジウム「高知県の学校資料を考える」を開催し、県内の学校資料を保存していくための課題について問題提起しました¹⁾。2020年度には、土佐清水市や室戸市の教育委員会と連携して、休廃校に残る学校資料の記録・保存活動を行うなど、地域の学校や教育委員会の保存活動を支援しています²⁾。本書で紹介する学校資料の多くは、高知県の学校資料を考える会が中心となり整理を進めてきた資料です。県内の資料や実践事例を参考に、皆さんの地域でも学校資料の保存活用を検討していただけたら幸いです。

第1章

学校資料って何だろう？



1

はじめに

近年、小中学校や高校で過去に使われた文書や教材、備品が、歴史や教育史の資料と認識されて、全国各地でシンポジウムが行われ³⁾、その保存や活用の取り組みが新聞などでも特集されて注目されています⁴⁾。

2019年7月、高知市内で開かれた30～40代の学芸員や学校事務職員らの研究会で学校資料の話題が出て、「高知にはどんな学校資料があるがやろう?」「高知でも学校資料を掘り起こしたいでね」などと盛り上りました。残念ながら、高知では学校資料の調査や研究は一部しか行われておらず、その価値はほとんど認識されていないというのが現状でした。

本書は、学校資料に関心を持った私たちが、県内の資料保存の現状や課題を考え⁵⁾、各地の教育委員会や地域の人たちと協力して調査を行ってきた2年間の成果をま

とめたものです。学校資料の調査には約50人が参加しましたが、その中に学校資料の専門家は一人もいません。それが持つ知識や体験、興味関心から、各々の視点で、広範で多様な高知県の学校資料の面白さや価値を考え、紹介しようと試みました。

学校資料に関わる方々に、まずは「学校資料って何だろう?」という所から興味を持って頂き、廃棄せずに整理保存して残せば、地域の記憶を伝える重要な歴史資料になるかもしれないと思付いてもらう、価値意識の「掘り起こし」⁶⁾のきっかけになればと本書を作成しました。自分たちが学んだ「学校」で使った文書や教材が、数十年経って地域を知る資料になる。そんな「小中学校・高校に残された地域資料の世界」をのぞいてみましょう。

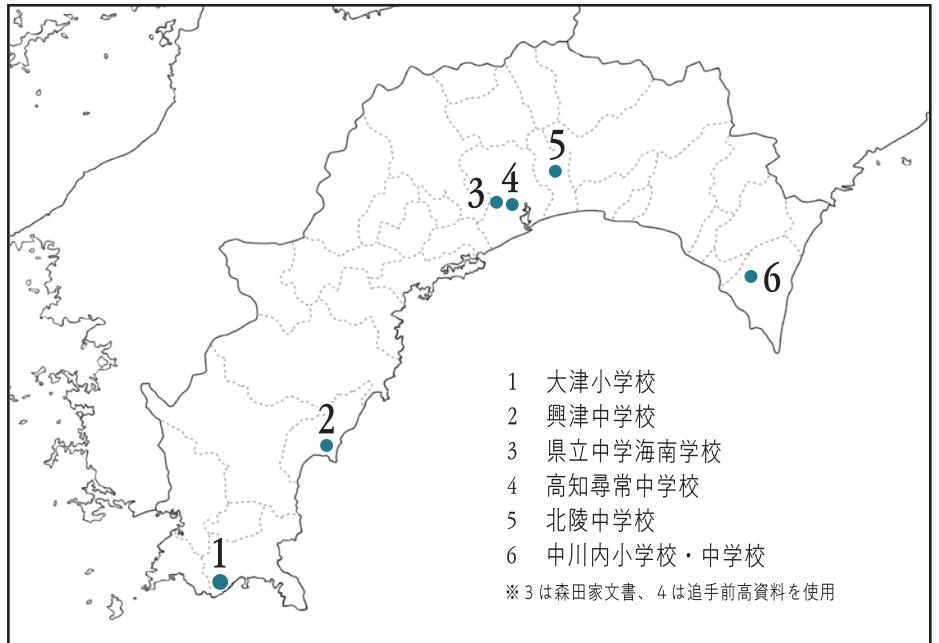


図1 本書で学校資料を紹介する学校



図2 学校資料の概念図(村野2020より作成)

2
学校資料って
なに?

私たちは、「学校資料」という言葉に、ワクワクするものを感じましたが、どんなものが学校資料になるのか、当初は分かりませんでした。他県での調査研究を調べると、様々なものが学校資料として認識され、保存や活用、研究、展示の対象になっていることが分かってきました。

『学校資料の未来』(岩田書院)によれば、学校教育法第1条は、「学校とは、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校」と規定しています⁷⁾。学校資料の対象となる学校は多岐にわたりますが、中でも明治期以来、住民の資財と労力に支えられて設立・維持された小学校は、地域の共有財産として認識され、地域のアイデンティティを支える身近な存在になってきました。こうした背景もあり、地域の小学校や中学校の資料は、地域資料としての関心も集めてきたようです。

学校資料は学制発布100年を契機にして1960年代以降、自治体の教育史編纂とそれに伴う資料所在調査で注目されました。1980年以降には学校の組織運営に関する文書や、学校の教育実践の中で作成された文書が学校資料と認識されるようになりました、学校内に保管された紙媒体を中心とした資料に加え、寄贈・収集された歴史資料や美術品、民具資料なども広義の学校資料として把握されました。2000年以降には教育学やアーカイブズ学の分野でも関心が広がっています。学校資料の定義も研究



分野や対象とする資料によって複数あり、共通の認識はまだ確立されていないようです。

このような議論の集約を目指し、地域資料としての学校資料を捉え直そうと2017年に開催されたシンポジウム「学校資料の未来」では、シンポを企画した地方史研究協議会が、学校資料を「学校という場に所在している資料」と定義し、「公文書館などの施設や個人が所有する学校関係資料までも含む」としています。

一方で、京都文化博物館の村野正景さんは「学校資料を種類や性格、存在する場所、経歴などで説明するとどこかがこぼれ落ちる」と指摘し、「学校資料は学校に関するあらゆるモノやコト」と定義⁸⁾。学校資料は包括的概念で、その下位に「学校（内）所在資料」と「学校外所在資料」があるという整理をしています(図2)。「所在資料」という言葉を使うことで、資料の所蔵者や関係者は誰かという資料のステークホルダー（利害関係者）と来歴を知ることが重要だと指摘しています。

私たちも学校資料の調査を通して、紙媒体の文書に限定されない様々なモノやコトが存在することを知り、学校資料を通して地域史や教育史を理解するために、地域資料としての性格や学校外所在資料の重要性を認識するようになりました。本書では、学校という場にこだわらず、「学校資料は学校に関するあらゆるモノやコト」と定義し、高知の学校資料について探っていきたいと思います。

3 学校資料の 価値とは？

なぜ学校資料を「資料」として残すべきなのか。その価値についても調べてみました。東京福祉大学の和崎光太郎さんは、価値が知られない資料の保存は、「よほどヒト・モノ・カネに恵まれている環境でない限り不可能」としながらも、「説得戦略」という言葉で、資料の価値を認識してもらい散逸を防いでいく重要性を指摘しています⁹⁾。資料の管理者への説明として、「学校の歴史を知るための資料」としての古い資料の学校記念誌の編纂・教材での使用、「思い出の場として学校を想起する資料」としての校内展示などの使用、「地域史の資料」としての博物館や図書館、文書館などの行政機関での使用という3つの価値と活用の可能性を紹介しています。さらに実際に学校資料が研究や展示などで活用されている分野を、学校史と考古、民俗、建築史、美術史、地域史、教育史、教育学に分類して紹介しています。

また、宮城県内で学校資料の調査を続ける宮城学院女子大学の大平聰さんは、学校で明治期以来使われる「学校日誌」に着目し、戦争の体験者が少なくなる中で、日

表1 学校資料の価値（村野・和崎編 2019より作成）

資料価値	概要
1 学校史的価値	学校の年史、沿革、特色、そのうつりかわりなどがわかる。
2 教教材的価値	現在の授業や学校活動での教材として利用できる。
3 教育学的価値	教育の変遷や今の教育のあり方を考えられる。
4 部活動的価値	地歴部などの部活動をおこなうためのきっかけ・資源となる。
5 地域史的価値	地域の姿や記憶を物語る。
6 学術的価値	人類の歴史を研究する考古学・歴史学・民俗学など学問の素材、研究素材となる。
7 学問史的価値	考古学や科学などの学問の歴史がわかる。
8 産業史的価値	教材作成などに携わった産業界のことがわかる。
9 象徴的価値	卒業生や教員、地域住民などの思いやアイデンティティ、記憶の拠り所、シンボルとなる。
10 社会的関係価値	資料の調査が資料に関わる人々を連帯し関係構築をうながす。
11 アートな価値	学校の美的景観づくりや現在のアートの素材となる。
12 ほかにも…	

誌の記述が引き継ぐべき戦争の記憶として重要で、地域の近現代史を知る情報源になるとして、その保存を呼び掛けています¹⁰⁾。香川県文書館の嶋田典人さんは、学校に関する記録資料、学校アーカイブズの視点から、公立学校の公文書管理で重要な文書を保存しながら、保存年限を過ぎた資料も重要な資料として文書館などで価値付けをして保存していく必要性を提起しています¹¹⁾。

高知県では2020年に公文書等の管理に関する条例が施行され、同年に県立公文書館ができたばかりですが、県外の事例にならって法令や公文書管理、公文書館の活動の中で、残すべき資料は継続的に保存していく仕組みをつくっていく必要があります。

また、村野さんは、学校資料を文化財の価値体系からとらえて、その多様な価値を表1のようにまとめ、それぞれの価値を伸ばし、保存活用につなげていくことを提起しています¹²⁾。高知での学校資料保存の活動はまだ始まったばかりですが、先行研究で示されたようなさまざまな「価値」を再発見していきたいと考えています。

4 本書で紹介する高知県の 学校資料

高知県では、学校の周年記念誌や閉校記念誌、自治体史等の刊行時に、学校や教育委員会に残された学校沿革史などの文書類、卒業アルバムの写真等が編集作業に使われ紹介されていますが、資料として公開されているものはほとんどありません。『高知追手前高等学校資料集』や『高知共立学校資料集』の刊行、高知市立旭小学校の明治30年以来の学校日誌の活字化など、わずかな事例があるだけです¹³⁾。

私たちはまず県内に残された学校資料の詳細を知るために、2020年度に県内各地の教育委員会などと連携して約5千点の所在資料の調査を行いました。本書で紹介するのは、土佐清水市の大津小学校（1993年休校、2004年閉校）、四万十町の興津中学校（2021年閉校）、高知市の高知県立中学海南学校（現高知小津高校）、高知尋常中学校（現高知追手前高校）、南国市の北陵中学校（資料は高知県立歴史民俗資料館に寄託）、室戸市の中川内小学校・中学校（2021年閉校）の資料など約60点です（図1）。特に、廃校舎からの資料救済に始まり、目録作成などの記録、クリーニングなどの保存を行った大津小資料（資料総数約4千点）が紹介資料の大半を占めています。

本書は、私たちが調査を通して面白いと思った資料をピックアップして紹介する「学校資料集」の形式を取りました。まずは県内の主要な資料としてはどのようなものが残っており、資料からどのようなことが分かるのかを、調査に関わった教職員や学芸員ら19人の目線で記しました。また、項目ごとに高知県の公立小中における文書や備品の管理規程との関係を付記し、本来規程通りであれば廃棄される資料の中にも学校資料として価値のあるものが存在することを示しています。全国で関心を

集めている学校資料ですが、実際の議論の場は学界が中心で、当事者である学校関係者の関心は決して高くないという現実もあるようです¹⁴⁾。まずは普段公文書や教材・備品などを扱っている県内の教職員の目線から、「学校資料とは何か」「どんな価値があるのか」を知ってもらいたいという思いで、実際の管理・運用との関係を記しました。

高知県では少子高齢化が進み、多くの学校が休校・廃校になり、地域コミュニティの維持が危ぶまれています。地域の中心だった学校に残された資料には、住民によって時代や関わり方は違っても、「学校」という共通の体験の一端が記され、若者や子どもたちに伝え、引き継ぎたい地域の記憶が織り込まれています。私たちは、学校資料を、地域の暮らしやつながりを見つめ直し、未来を考える材料の一つになる地域資料と捉え、学校や教育委員会、地域の皆さんと保存活用に関わっていきたいと考えています。

（浦瀬慶太）



大津小に寄贈保管された絵画と定置網の模型

第2章 高知県の学校資料集



第2章では、これまでに高知県の学校資料を考える会が中心となって調査した高知県の学校資料の中から

53項目の資料を紹介します。さまざまなコトやモノが対象となり、多様な価値を持つ学校資料の面白さを、
小中学校の教員・事務職員、学芸員、大学教員ら19人の多角的な目線で掘り起こしてみたいと思います。

資料集の見方

資料の項目

タイトル

紹介する資料名（出典資料名）



資料の説明が書かれています。

資料のさらに詳しい解説が書かれています。

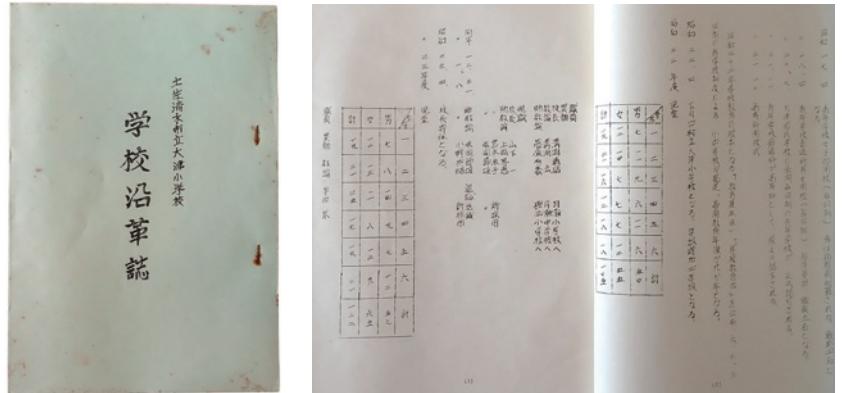
資料のツボ!

● 管理規程との関係 ● 学校での管理・運用ルールを説明しています。
(第3章「残らない？残せない？学校資料」を参照)

学校沿革史

学校の歴史をつなぐ基本資料

「学校沿革誌」（大津小資料）



児童数、職員の変遷などが記載された学校における基本資料の一つ。1875年の大津尋常小学校創立から1974年度までの事柄が掲載されている。創立に関して以外、1899年までの記述ではなく、それ以降校舎改築など具体的に記されるようになる。児童数、職員の変遷は、大津国民学校から大津小学校に改められた1947年度からの記録が残る。1973年12月には、翌年度に控えた開校百年記念式典の計画が発起されており、本資料は、その記念誌編纂のために編まれたものと想定される。
(望月良親)

資料の ツボ！

本資料の記述は、その後1975年発行の『開校百年記念誌』、1993年発行の『大津小学校 休校記念誌 叶崎』へ引き継がれる。いずれも「学校の沿革」と題して、児童数の変遷などに利用されていると考えられる。開校百年のころは、土佐清水市で市史の編纂や社会科副読本の作成が行われており、「副読本」の項（32頁）でも述べているが、地域の歴史が振り返られている時期であった¹⁵⁾。その中で、大津小教員の上岡忠紀が両書の編纂に携わり、開校百年記念にも関与していた。地域に生きる教員が、地域の歴史を叙述していた。上岡は、その後最後の大津小校長となり、休校記念誌の編集後記を書くことになる¹⁶⁾。

【凡例】

- ・資料中の旧字体や異体字は原則常用漢字などに改めた。
- ・引用資料には、一部今日の観点から見て差別的と思われる表現があるが、資料性に鑑みそのままとしている。
- ・掲載資料の中には、個人情報保護の観点から資料画像を黒塗加工したものがある。

● 管理規程との関係 ●

学校沿革史は「1 総務①経営」に分類され、保存年数は永年。学校の歩みを記す重要な文書であるが、自治体・学校により記述内容には濃淡がある。

地域の姿と子ども像を謳う

「土佐清水市立小中学校校歌集（音楽部会編 1987）」（大津小資料）

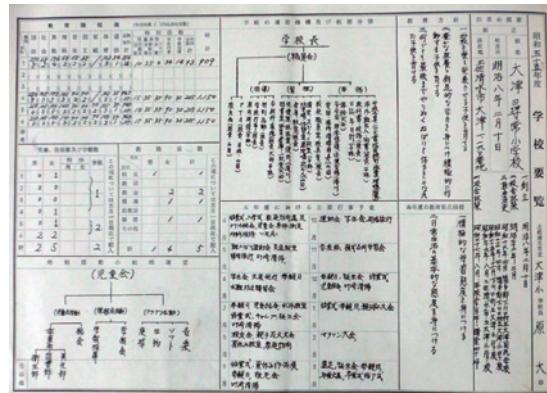


近代学校制度が始まって以来、校歌制定は法令上の義務ではなく、「校歌はなかった」と証言する古老も多い。土佐清水市域でも、大正11年（1922）制定の大津小の事例もあるが、窪津・清水・足摺岬の各小や貝ノ川中などは、いずれも昭和40年代の制定であり、圧倒的に戦後のものが多い。北見志保子作詞・平井康三郎作曲という清水中の事例がある一方、職員一同作詞作曲（貝ノ川中）、6年1組作曲（清水小）などもある。校歌制定には、作詞・作曲者への報酬も必要であった。

（渡部淳）

学校としての姿記す

「昭和五十五年度 学校要覧」（大津小資料）



「学校要覧」は、都道府県が作成する『(都道府) 县勢要覧』や、市町村の『市(町村) 勢要覧』などに当たるもので、学校の現状についての概要をまとめた文書である。大津小の「学校要覧」は、昭和38年（1963）から昭和63年（1988）までのものがほぼすべて残っている。これらは、1枚の用紙に「沿革の概要」「教育方針」「本年度の教育重点目標」「本年度における主要行事予定」「教育課程表（年間の授業時数）」「児童数及び学級数」などを記している。

（小幡尚）

資料の ツボ！



校歌の多くは、2つの分野で構成される。前半では、「下ノ加江川」「鏡川」「春日川」「高岡山」「足摺岬」「鷺尾のふもと」「しなねの森」「天守のいらか」などの個別地名や風景を以て周辺環境が説明され、特に海辺の学校では、「黒潮」「大洋」「南洋」など太平洋に関する歌詞は必須である。後半では、「体をきたえ知恵をねり」「勤労の汗たくましく」「真理の旗を高らかに」「公平自尊独立の」「村は明るく人直き」「二つの村があい寄りてここに建てたる学び舎に」「平和の風に光あれ」など、時に地域の歴史や理念までを含んだ徳目が謳われ、地域や時代が求める子ども像を示すのである。私立学校や実業学校では建学精神が強調され、独自性は更に高まる。

資料の ツボ！



写真は昭和55年度（1980）の要覧である。ここには、この年の大津小の「学校としての姿」が克明に記されている。例えば児童数・学級数・教職員数などの「その年」の状況がよく分かる。この資料をさらに「語らせる」ためには、各年度の記述を比較して読み解き、内容の変遷をたどる必要がある。例えば、児童数やクラブ活動、行事の変遷などについて明らかにすることが可能である。また、「教育方針」の変遷も読み取れる。1987年にはじめて「小規模校の特性を生かし」という文言が現れていることが分かる。

● 管理規程との関係 ●

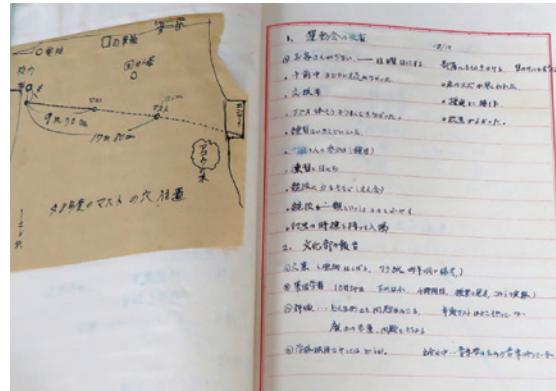
校歌については文書管理規程に位置付けがない。学校沿革史などに校歌制定の経緯が記されることはあるが、作詞・作曲者以外は不明な学校が多い。

● 管理規程との関係 ●

学校要覧は「1 総務①経営」に分類され、保存年数は3年又は5年。関係者や来校者らに学校説明資料として配られる。学校経営や教育活動を端的に示す資料として、永年保存の学校沿革史に綴じられて長く保存される例もみられる。

土曜日に週目標の達成チェック

「職員会・研修会記録 S48」(大津小資料)



昭和 48 年度（1973）の大津小の職員会と校内研修会の記録が記される。年度当初の 4 月は計 7 回と盛んに職員会を開催。校時・時間割・校務分掌・教科主任・クラブ活動・年間行事（第 2 回）、教育目標（第 4 回）、研究主題や教科研究の具体的な取組（第 5 回）などが決められている。また、行事の実施計画や実施後の反省等も職員会で行われ、1 年間の学校経営の実態を知ることができる。

（土居喜一郎）



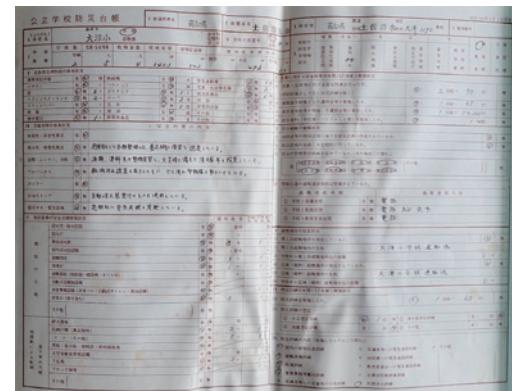
昭和 48 年度の大津小は、校長と教職員の計 6 人で、複式 3 学級 24 人の児童を担当。3 つの教育目標に対し、教職員の努力目標を 3 つ掲げ、連動した研究主題も設けた。職員会では各学期の反省点が整理され、取り組みを検証していた。一方、子どもたちの児童会も、職員会で決めた月目標をもとに各学級で週目標を出し、会で議論して決定。児童と教員の「週直」（係）が、週目標が守れたか土曜日に評価する仕組みが記されている。うまく機能したかは分からないが、一時期もてはやされた PDCA サイクル（Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Action（改善）の頭文字）に似た経営が、すでに学校全体で実践されていたようである。

● 管理規程との関係 ●

職員会議録は「1 総務①経営」、校内研記録は「2 教務④研究」に分類され、保存年数は 3 年又は 5 年。長期間保存できれば、学校の特色ある運営と研究の流れを追うことができる。

ソフト・ハードの対策確認

「学校防災台帳・施設配置図」(大津小資料)



昭和 58 年度（1983）の大津小の公立学校防災台帳（台帳）と施設配置図、平面図を綴じ込んだファイル。台帳は、学校の防災実態を把握し、体制確立と防災意識の高揚を図ることを目的に、公立の幼稚園、小中学校、高校、特殊教育諸学校で作成された基礎資料。応急防災用物品や、薬品等の危険物の保有状況、避難・防火設備の点検状況、防災組織、情報伝達手段、避難場所、訓練の実施状況などが詳しく記載されている。

（楠瀬慶太）



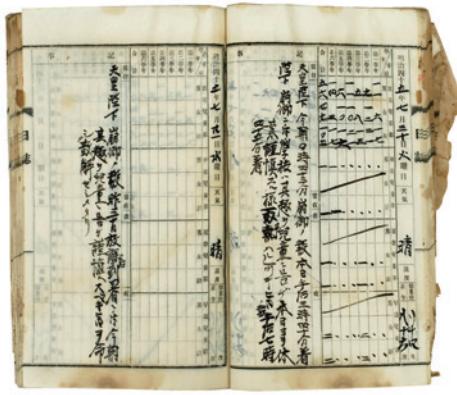
台風銀座と呼ばれた高知県では、昭和 45 年の 10 号台風、昭和 50 年の 5 号台風、昭和 51 年の 17 号台風を筆頭に毎年台風被害が出ていた。学校現場では台風以外にも、学校施設での火災続発に伴う県の施設管理徹底の通達（昭和 46 年）、県による学校への『地震の手引書』の配布（昭和 49 年）など、幅広い災害への対策・啓発が行われていた。台帳を見ると、様々な災害を想定した危険地域区分の記載覧があり、大津小は台風常襲地帯に指定されている。大津小の校舎が台風被害で何度も被災したことは、大津小資料の「学校日誌」などから確認できる。約 40 年前の学校でも防災へのハード面、ソフト面の対策が細かに行われていたことが確認できる。

● 管理規程との関係 ●

危機管理は「1 総務①経営」、施設は「4 財務①管理」に分類される。学校防災関連、施設設備関係（台帳・図面等）の多くは保存年数が永年・常用であり、学校運営と維持の基礎資料として廃棄は想定されていない。

国家と地域を語る

「大津小学校学校日誌」(大津小資料)



旧大津小には、明治25年（1892）～昭和60年（1985）の約90年の日誌が残る。その内容は、現在の日誌に比して遙かに詳細且つ具体的である。例えば、明治44年度日誌には、記載すべき事項として、月日、気象、教師・児童出欠、児童賞典、儀式、休業（休校）、教師任免・進退、学級編成・受持、参観などが列記され、時に筆者の感想や来校者の発言、更には自作の短歌が記されるなど個性豊かなもので、資料集・読み物としても飽きることがない。

(渡部淳)



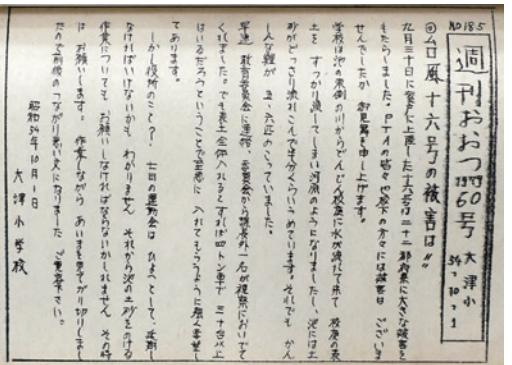
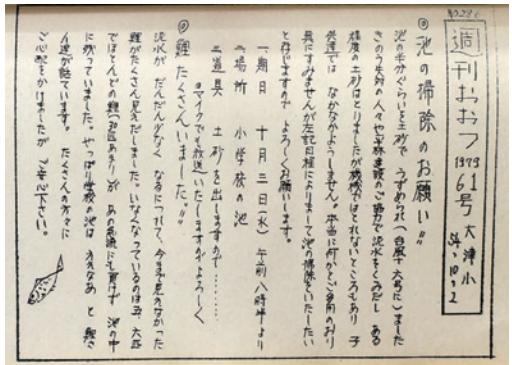
明治後期の日誌をみると、明治40年頃から風紀に関する記述が増加する。同43年、校内に「児童風儀協議会」が設けられ、女子の頭髪衛生指導が開始、「方言正語比較表」が作成され、主に男子の共通語教育が推進されている。教室には「誠実・孝行・遵奉・自治・共同」の教訓五箇条が掲示、教員にも「小学校教員心得」が提示され、家庭訪問も始まった。背景には、小学校令（明治33年）に始まる就学児童・学校（尋常・高等）の増加をうけての義務教育6年制の導入（同40年）、「戊申詔書」の発布（同41年）など、日露戦後の国民教化政策の展開があった。土佐の西端にある小さな小学校の日誌には、学校は勿論、地域、更には国家の歴史が記されている。

● 管理規程との関係 ●

学校日誌は「1総務②総務」に分類され、保存年数は3年又は5年。ただし、公立小中では統合型校務支援システムの導入により電子上で作成することとなったため（2021年度～）、管理文書として規定しない自治体もある。記載内容も行事名を書くのみなど簡略化が進んでいる。

毎年100号、学校の日常記録

「週刊おおつ」(大津小資料)



「週刊おおつ」は、大津小が発行していた「広報紙」で、先生方が児童と家族に宛てて記した文章を謄写版印刷したものである。昭和53年度（1978）初めから昭和55年度（1980）末まで毎年100号以上発行されていた（途中で「学校通信おおつ」と改称）。「週刊おおつ」以前には、月刊の「学校だより」が1973年度から1977年度まで発行されている。これらの「学校通信」は、学校の日常を知ることができる基礎的で貴重な史料である。

(小幡尚)



大津小の学校通信は、学校の規模が小さいため、学年通信・学級通信の性格も有している。子どもたちの学校での様子がきめ細やかに描写されている。また、学校と集落との関わりについての記述も多く見られる。記載されている記事のほとんどは日常に関するものだが、ときどき非日常的な話題が紛れ込む。60号（1979年10月1日）には室戸に上陸した台風16号によって校庭と池に大きな被害が出たことが記され、61号（同月2日）では池から土砂を取り除く作業への協力を保護者に呼びかけている。

● 管理規程との関係 ●

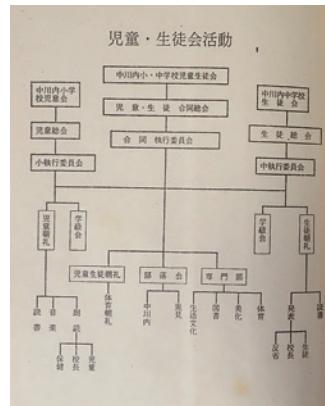
学校通信や学級通信などの家庭・地域向けのおたよりは、「2教務①教務」又は「5涉外②諸団体」に分類され、保存年数は1年。校長や学級担任が思いを込めて書く通信は日々の学校教育活動を活写しており、長期間保存できれば時代や地域の特色を映し出す重要な資料となる。

組織図に見る 中山間の学校運営

「児童・生徒会活動」(中川内小中資料)

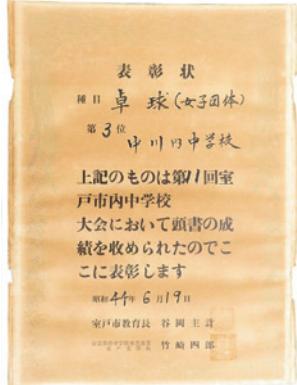
平成元年度（1989）の「学校要覧」に収載された児童・生徒会活動の組織図。両会は全校児童生徒で組織され、学校生活の充実と向上のために活動を行う。併設校の中川内小中では児童会と生徒会が別組織として存在し、審議機関である総会は小中別に開かれ、朝礼の内容も異なっていた。ただし、活動の中心は児童生徒会であり、合同総会を開催し、専門部（委員会活動）、部落会（地区会）、体育朝礼は小中一緒に実施していた。

（目良裕昭）



地域に支えられた強豪校

「卓球部賞状」(中川内小中資料)



室戸市の中川内中卓球部は長年、高知県の卓球大会で個人や団体で優勝するなど、県内屈指の強豪校として活躍していた。その活躍には、卓球部顧問の教員の指導だけでなく、部員の保護者や地域の人々の指導や協力によるところが大きかった。体育館には、大会で好成績を収めた際の賞状とともに出場選手の集合写真が掲示され、校内にも大会の賞状が、部活動の写真や部を紹介した新聞記事とともに保管されている。

（土居喜一郎）

資料の
ツボ!

校内に保管・掲示された部活動関係の賞状は約150点。最も古いものは昭和44年（1969）、室戸市内卓球大会で女子・男子の団体が3位に入った際の賞状である。地元紙『高知新聞』のスポーツ面に登場する同中卓球部の記事は371件。昭和46年の県中学新人卓球での男子団体初優勝を皮切りに躍進し、昭和50年代には強豪校へ成長していく。その軌跡は、新聞資料と賞状を対応させることで、より詳しく追うことができよう。また同部が長く地域の集会所（2004年から新設の体育館へ）で練習していたことからも、部活動に対する地域の理解と協力が窺える。

資料の
ツボ!

中川内小中には古い「学校要覧」が残り、児童・生徒会組織の変遷を追える。昭和55年度（1980）までは小中別の組織であったが、次に確認できる昭和61年度には委員会活動を合同で行う執行委員会が編制され、組織図も一つになった。平成元年度までには小中合同の児童生徒会を中心とする組織に改変されており、全校での活動が多くなっていったと推測される。中山間地域の課題である児童生徒数の減少に苦慮しながら、活動を停滞させないために工夫する学校運営の姿を垣間見ることができる。

● 管理規程との関係 ●

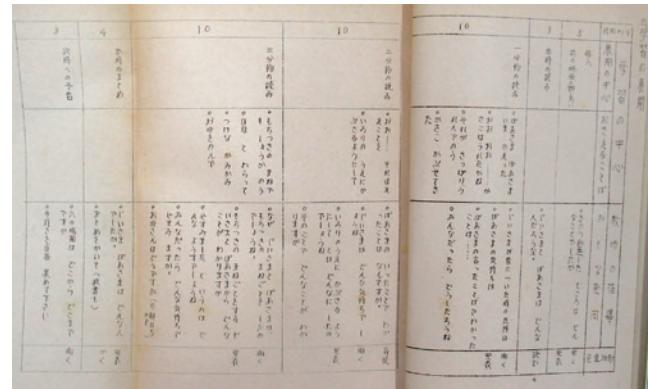
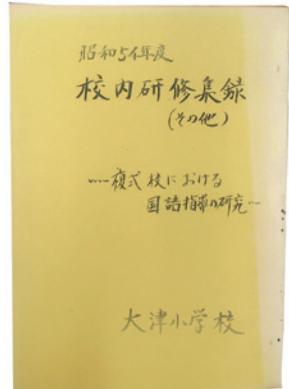
「学校要覧」の項（11頁）を参照。

● 管理規程との関係 ●

部活動関係の文書は「2教務①教務」に分類され、保存年数は5年。練習計画書や大会参加関係書類などが保存される。表彰状の類は明確な規定が無く、表彰を受けた児童生徒の卒業や掲示場所の不足を契機に掲示から外され、保存又は廃棄される。

学習指導案に込められた思い

「校内研修集録」(大津小資料)



昭和 54 年度（1979）の国語の学習指導案、「市 P 連研究」での発表資料、「学事報告」などが集録されている。大津小では前年から国語教材を用いた全校一斉学習に取り組み、54 年度は「かさこじぞう」と「かわいそうなぞう」を教材に実施。2 年生から 6 年生までの発達段階や学力の異なる児童 14 人への一斉授業であったため、全員が主体的且つ協力して取り組むことができるよう配慮や工夫を施した学習指導案を作成している。

(橋本達広)

資料の ツボ!

「かさこじぞう」は、岩崎京子（児童文学作家）が民話をもとに描き直した作品であり、「かわいそうなぞう」は、土家由岐雄（児童文学作家）が実話をもとに創作した作品である。両者は、小学 2 年生向けの教材として以前は教科書に採用されていた（現在は「かさこじぞう」のみ採用）。大津小では、両作品を通して心豊かな児童の育成を目指していたようで、学習指導案もその「ねらい」を踏まえて作成されている。「かさこじぞう」では「やさしさやくじけない心」、「かわいそうなぞう」では「生命の尊さ 平和の願い」を考えさせる發問例がいくつか記載されている。児童や児童を取り巻く社会環境、地域性などを考慮して「ねらい」を設定している。

● 管理規程との関係 ●

校内研修・研究関係は「2 教務④研究」に分類され、保存年数は 3 年又は 5 年。各学校における研究・研修の成果としてまとめられた集録や紀要は、長期間保存されることも多い。

小さな学校の実践を記録

「児童をとりまく環境と文化」(大津小資料)

昭和 59 年（1984）10 月 17 日問題別教研資

料で、副題が「小さな学校の日本一小さな田

んぼ」である。「大津には現在田んぼがありま

せん」から始まり、「先生、田んぼつくりたい。

つくれんろうかね」という児童の言葉から、

田んぼを作った実践を謄写版刷りで作成した。

4 月 24 日の田づくりから 10 月 11 日の収穫

祭まで、イラストも豊富であり、子どもたち

の日記や声、教員との会話を載せ、大変印象

的な仕上がりとなっている。

(筒井秀一)



資料の ツボ!

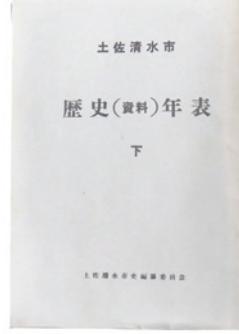
大津小資料には、「理科教育研究のあゆみ」も残る。「へきち実験学校」に指定された大津小が、発表期日昭和 52 年（1977）11 月 2 日に向け作成したもの。副題は「複式理科教育の改善をめざして」、研究主題は「進んで学習する理科教育」である。3 年間の複式理科教育の実践と課題がまとめられている。これは県教委の指定校報告ということで、活字で刷っている。「小さな学校の日本一小さな田んぼ」の昭和 59 年謄写版刷りは、ほぼ最後期の謄写版刷りではないだろうか。この味はさてがたい。また 6 年生作成の「菊の観察記録」は昭和 50 年 7 月 1 日～11 月 19 日まで 19 頁にわたり、「絵」と「気のついたこと」等をまとめた力作である。

● 管理規程との関係 ●

自治体に設置された教育研究所等が主催する教育研究の会では、教職員が教科等の部会に所属し研究を進めている。分類等は「国語」の項（18 頁）を参照。

市史編纂の成果を教材に

「土佐清水市歴史（資料）年表」（大津小資料）



昭和 51～53 年（1976～78）に土佐清水市史編纂委員会が発行した（上）（中）（下）（付一・二・三）からなる歴史年表。（上）は原始・古代・中世編、（中）は近世編、（下）は近代・現代編。市史編纂と連動し、研究成果を基にした学校教育用冊子が教材として作成された。「郷土を見直し、再見し、尚一層の研究と共励のうえにたって未来へと開ける郷土造りの一助」となることを目標に、歴史事項を網羅的に説明している。

（石畳匡基）

資料の
ツボ！

年表（付一・二・三）は、土佐清水市域にある史跡に関して詳述した付録として充実したものである。例えば、（付二）には「古城址調査図」が付き、中世城郭の布城などの調査図や「中世清水浦想像図」が記載されている。（付三）には四国霊場第 38 番札所・金剛福寺の境内図や、幕末に土佐清水市域に構築された砲台跡調査図などが収録されている。これらは机上の勉強だけではなく、社会科見学に行く際の手引きとしての活用も期待されたのであろう。

● 管理規程との関係 ●

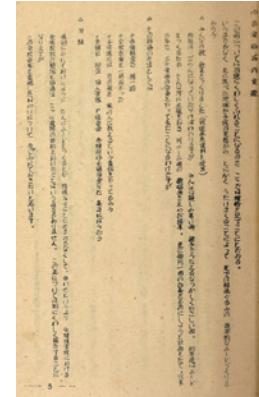
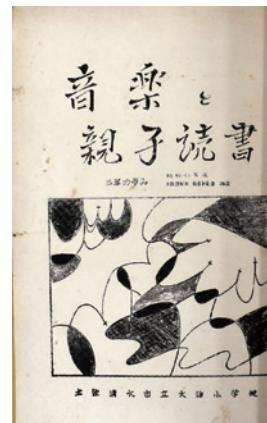
社会科の副読本は、教育委員会や教育研究所などが編纂し、改訂を重ねながら県内各地で発行されている。「2 教務」に分類（保存年数 5 年）する自治体もあるが、明確に位置付けていない自治体が多い。地域によって特色が出る資料だが、古い内容の冊子が学校に残ることは少ない。

一緒に「うたう」ことが育んだもの

「音楽と親子読書」（大津小資料）

昭和 41 年（1966）から 3 年間、大津小は土佐清水市教育委員会の研究指定校となった。子どもや地域の実態から目標（協調性・創造性・表現力を育むこと等）を設定し、音楽実技（「うたうこと」と「親子読書」を手立てに）、教員 5 人による実践研究が行われた。本資料はその報告書である。「うたうことは、授業だけでなく PTA や「婦人学級」等の行事で取り入れられるなど、その実践は学校の枠組みを超えた内容となっている。

（濱田実佑）



資料の
ツボ！

音楽を研究分野に選んだ理由としては「音楽教育は全般的におきわまれられ」ていること、「複式と云う学校形態」を生かすこと、何より音楽の持つ「楽しさ」を必要とするなどを挙げている。初年度の実践は「とにかくうたいまくる」ことで「音楽的なムード」を生み出すことを目標とし、教員手作りの歌曲集『歌』を各家庭に配布した。また、「やわらかい声でなだらかに表現」「合唱の美しさを理解」といった学年目標をたてつつも、「学級でおぎない切れないものをみたしあう」ため全校合唱にも重点を置いた。この結果、「けんかが少なくなった」「集団の規律がみちがえるくらいよくなかった」といった成果が生まれた。

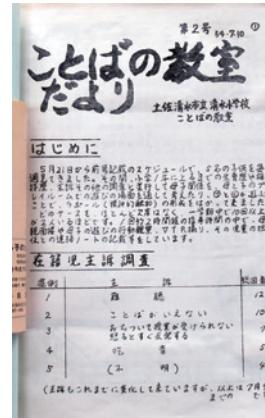
● 管理規程との関係 ●

「国語」の項（18 頁）を参照。

昭和の特殊学級の試行錯誤

「ことばの教室だより」（大津小資料）

特別支援学級は、軽度の障害のある児童生徒の教育のため、小中学校に設置された学級。知的障害、弱視、難聴、言語障害および自閉症などの児童生徒を対象とした。教育内容は原則学習指導要領に沿うが、障害の状態や特性に応じて、治療的指導、教科補充指導、独自の教科内容による指導など多様な指導が行われた。なお、平成18年（2006）の学校教育法改正までは特殊学級と称されていたが、実質的な内容はほぼ変わっていない。



(石烟匡基)

資料の ツボ!

特殊学級における教育実践事例を共有するために行われた研究会や勉強会の資料が残されている。大津小資料には、昭和 54 年（1979）に土佐清水市立清水小学校で発行された「ことばの教室だより」が残されている。当時特殊学級に在籍した 5 人の児童に関する調査内容を紹介する。例えば、生育歴の調査を実施し、小学校入学前の親と子との付き合い不足が原因で、ことばの発達が遅れた事例が記されている。これは早期の発見で、適切な処置によって、ことばの教室の通級の終了ができそうな段階であるという評価がなされるなど、各学校の努力がみえる。

● 管理規程との関係 ●

「2 教務①教務」に分類され、特別支援教育関係として明確に規定する自治体もあれば、児童生徒に関係する文書として他の教務関係文書と一緒に保存している自治体もある。いずれも保存年数は5年である。

P T A が研究活動に協力

「幡多へき地複式教育研究集録 第5集」(大津小資料)

幡多へき地複式教育研究協議会編集の昭和56年度（1981）研究集録。幡多郡内のへき地・複式教育の研究内容や成果と課題が市町村ごとにまとめられている。巻頭には「幡多地区複式学校の実態」なる表が掲載されており、複式学級を有する学校（複式校）と在籍する児童・教員の数、複式教育関連予算の金額と内訳、年間行事、複式校に勤務する教員の実態（単身赴任等の通勤関連）が市町村別に一覧で確認できる。



(目良裕昭)

資料の
ツボ！

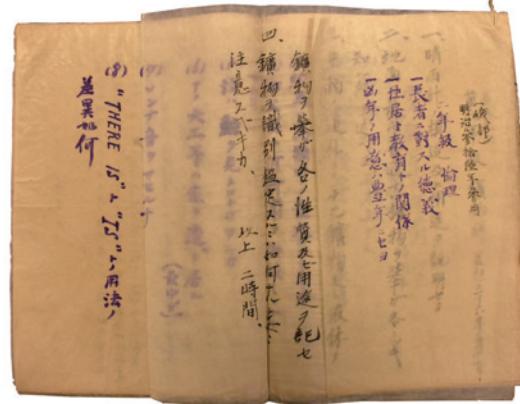
昭和 56 年度は高知県で全国へき地教育研究大会（第 30 回）が初開催された年で、幡多郡からは三原小・中半小・十川小が分科会を受け持った。詳細が分かる十川小では全国から 270 余人が参加し、2・5 年の体育科授業が公開された。研究発表者は発表にかかる「ビデオ、写真等の資料」を P T A が作製してくれたことに謝意を示している。P T A 会員の声も寄せられ、研究指定を受けてから「学校と P T A が一体となって環境の整備や遊具等の作成に努めてきた」経過や授業を見た母親が感動して涙したことなどが綴られている。P T A が学校の研究活動に全面的に協力し、教職員と両輪となって推進する姿は、へき地校ならではの教育の在り方であろう。

● 管理規程との関係 ●

「国語」の項（18頁）を参照。

知識と論述力を試される

「明治参拾陸年試験問題用紙」(森田家文書)



旧高知県立中学海南学校（現高知小津高校）2学級で明治36年（1903）3月に実施された試験の問題用紙。倫理、鉱物科、文法会話作文、代数、日本史、地理、漢文、国語の8科目の問題が綴じられている。基本は3～4問で文章題中心、代数・英語は8問だった。「明治卅七年度大試験時間割表」も参考にすると、試験は1日2科目ずつ5日間にわたり、試験時間は1科目2時間で午前中に終了。現在の高校の中間・期末考査に似た形式だった。

（楠瀬慶太）

思い出の集合体

「卒業記念パネル」(大津小資料)



大津小の昭和55年度（1980）卒業生が卒業の記念に制作した校章のパネル。この資料は、玄関から入ってすぐ左の廊下壁面の見上げる場所に掲げられていた。中央に大きく校章が配置され、四辺はケーキのデコレーションのように愛らしく文様が配されている。文字や文様は絵具ではなく、すべて貝殻が使われている。

（影山千夏）

資料の ツボ！

森田家文書（近代）¹⁷⁾は、香美市の郷土・森田家に伝來した文書群。森田家の子弟は明治期に兄弟で海南中に通っていた。文書群には明治31～37年の試験問題や、生徒が学校に提出した遅刻届や忘れ物届などが含まれており、各学級・科目で求められた知識や生徒の学校生活を知ることができる。試験問題を見ると当時の生徒は知識だけでなく論述力を試されたようである。古い冊子形態の教科書は残りやすいが、このようなプリント形式の試験問題は試験終了後には実用性がなくなるので廃棄されることが多く貴重である。かつ森田家文書のように複数試験問題が残っていれば、教育の変遷についても知ることができる。

● 管理規程との関係 ●

試験問題は「2教務①教務」の児童生徒評価資料として5年保存と定める自治体もあるが、明確に規定していない自治体もある。

資料の ツボ！

大津小資料の中に、幸いにも制作風景の写真が残されていた。子どもたちが海岸で採取してきたのであろうか、貝殻が紙の上に置かれている。貝を貼ろうとしている男子に、中央の男子が真剣な表情で何か声をかけているように見える。隣では女子がのんびりとほほえんでいる。この子たちの日々の関係性が制作中の写真から伝わってくる。経年のために貝殻は何箇所か剥落しているが、エッジの効いた校章、真っ直ぐな文字、一糸乱れぬ文様、隙間なく几帳面に貼り込まれた小さな貝殻。堂々としたこの卒業記念パネルは、子どもたちの思い出の集合体として晴々と私たちの前に現れるのである。

● 管理規程との関係 ●

児童生徒が共同で制作した卒業作品は、木彫案内板やパネル、壁画など多種多様なものが残されている。学校で長く大切に扱われるが、破損や老朽化、校舎改築などを契機に廃棄されることが多い。

ミュージアムで 地域防災に役割

「興津地区の防災マップ」（興津中資料）



令和3年（2021）3月に開校した四万十町の興津中では隣接する興津小とともに、京都大学の矢守克也研究室と共同で地域の防災を考える取組を10年以上にわたって続けてきた。惜しまれながらも閉校となった興津中であるが、残された校舎の一室は防災ミュージアムとして、地域の防災を考える新たな役割が期待される。ミュージアムには、生徒が取り組んできた防災学習の成果物が展示されている。

（水松啓太）

資料の ツボ！

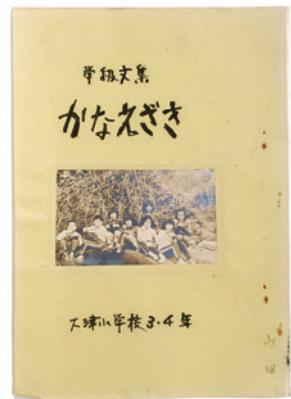
教室の壁面に掲示された防災マップは、児童生徒が実際に興津地域を歩いて描いたものである。毎年作成された防災マップはどれも個性的で、それぞれのマップのテーマも様々である。地域住民へのインタビューを踏まえて海沿いの危険な場所を描いたマップや、山に近いという興津の特性から、地震時の土砂災害警戒情報を探したマップ、地震が起きたと想定して高台に避難する際に気づいた危険な場所を描いたマップなど、10枚以上の防災マップが展示されている。こうした防災学習の取り組みは、子どもたちの防災意識を高めるだけでなく、取り組みに関わった地域住民の防災意識の向上にも少なからず貢献したであろう。

● 管理規程との関係 ●

防災マップや交通安全マップは、総合的な学習の時間や特別活動などの学習成果として作成されることがある。模造紙で大きく一枚にして掲示する、一枚刷りにして家庭や地域に配布するなど形態も様々である。保存に関する規定は無い。

児童が綴る赤裸々な証言集

「学校文集 かなえざき」（大津小資料）



明治期の定型文を筆写する作文教育に替わり、大正期に登場した生活綴り方運動は、平易な文章で生活を綴り、子どもの生活・学習意欲を培うことを目的とし、高知県出身の小砂丘忠義や上田庄三郎が中心であった。戦時に一時中断したが、戦後に復活。様々な主題による文集が編まれた。それは教育成果であると同時に、当時の子どもたちの貴重な証言集である。ある文集には、担当教師が「心の底までのぞきみることができる」と記している。

（渡部淳）

資料の ツボ！

時は高度経済成長の真っ直中。大津の母親は、とにかく「おごる（怒る）」。父親は、とにかく酒を呑む。そして、夫婦揃ってよく働く。母は田畠を耕し、縫製工場や建設会社で働き、夫の貝採りにも関わる。父は、貝・海老採り、大敷・小網で働き、カツオ船や遠洋船・珊瑚船に乗り、1年の多くを海上で過ごす者も多い。昭和43年(1968)の高知市への修学旅行は、「初めて」の連続。四万十川、土佐佐賀から乗った汽車、土電会館のエスカレーター、お城の動物園でみた猿、「子どもの国（博覧会）」で経験したジェットコースター等々。学校文集は、子どもたちが多くの方言で綴る、赤裸々な証言集であり、言語・地域・家族・産業・習俗等々、時代情報の宝庫でもある。

● 管理規程との関係 ●

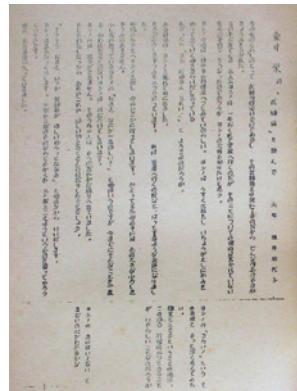
文集は児童生徒の学習活動の成果物であるが、文書管理規程では規定されない。しかし、慣例として毎年制作している学校も多く、校長室や図書室などに歴年の文集が保存されている例はよくある。

親子の親睦取り戻す

「親子読書感想文集」(大津小資料)

親子読書は昭和35年(1960)、児童小説作家であり当時鹿児島県立図書館長を務めた椋鳩十によって提唱され全国へと広がった「母と子の20分間読書」運動に始まる¹⁸⁾。その目的は「子どもの心を開き、親子の会話を取り戻すこと」であった。大津小でも子どもの調性の欠如や言動の粗雑さ、家庭の放任姿勢を問題視したことから、心をはぐくみ親子間の親睦を取り戻すことなどを狙いとして昭和39年(1964)から取り入れている。

(汲田美砂)



資料の ツボ!

本資料は大津小が親子読書の取組を始めて3年目にあたる昭和41年(1966)に編まれた感想文集だが、目を引くのは壺井栄作品の占有率である。実際に掲載されている感想文の約半数が栄作品を読んだもので、他には海外児童文学と鈴木三重吉などの名があるものの、多数に選ばれているのは栄だけだ。栄は、昭和27年(1952)発表『二十四の瞳』の映画化によって「壺井栄ブーム」を呼んだ児童文学作家で、昭和30年代から多くの小中学校教科書にその作品が掲載されている¹⁹⁾。しかし、この偏った選書からは当時の栄の知名度や人気だけではなく、終戦を境にした「児童教育の揺らぎが垣間見える²⁰⁾。

● 管理規程との関係 ●

「文集」の項(27頁)を参照。

家庭(母親)

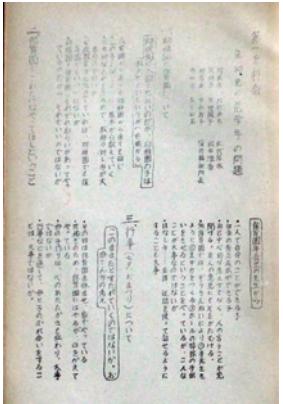
子どもの未来を思い、語り合う

「第19回 土佐清水市おかあさんと女先生の会」(大津小資料)

「土佐清水市おかあさんと女先生の会」第19回(昭和59年度)開催内容をまとめた冊子。

当日は、講演会「親と教師でつくる教育 どこの子ものびる」のほか、「乳幼児と低学年の問題」「子供の生活と学習」等をテーマにした4つの分科会が開催された。冊子冒頭の市長メッセージには「皆様のたゆみないご努力と積極的な活動によりまして、回を重ねるごとに益々盛況を呈して」とあるとおり、地域における同会の存在感を窺わせる。

(濱田実信)



資料の ツボ!

参加者が最多の54人となった第一分科会では、「幼稚園と保育園」について会員同士で活発に議論された。幼稚園へ入園させるか悩む母親に対して「保育園も幼稚園もそれぞれねらいがあってやっている」「家庭教育さえ注意していれば(どちらでも問題ない)」の意見が出たほか、「どの子も同じように、基本から教えていく」「保育園から来ても、幼稚園から来ても同じ」など、幼稚園・小学校教員の発言と推測できるものも見える。このように各分科会では、「おかあさん」が悩みを共有した後に「女先生」が学校側の立場から意見を述べる流れが多く見られた。また「共稼ぎ」など各家庭の事情を考慮した話し合いがなされていることも興味深い。

● 管理規程との関係 ●

教育や生活、平和などの諸問題を母親・女性という立場から考える母親大会の一種であろう。教職員も運動に参加し、学校が会場となる場合もあるが、関係文書は学校の管理規程では規定されない。

父の帰宅待ちわびる

文集「おとうさんおかあさん」「おとうさん」（大津小資料）



四国最南端に位置する土佐清水市は黒潮が日本で最初に接岸する地形から多種多様な魚が集まる好漁場として知られる。また戦後、全国的に推奨された遠洋漁業の漁獲高は1970年代に最盛期を迎える²¹⁾。文集は、ちょうど遠洋漁業最盛期に、父の日・母の日を記念して編まれたものだ。時代を反映するように、文集中には父親は1年の大半を船で過ごし不在という家庭の姿が多く見受けられる。

（汲田美砂）

資料の ツボ！

子どもたちが両親への思いを綴った作文は、「お父さんお元気ですか」と普段会えない船上の父を気遣う言葉で始まるものも多い。一本釣り近海かつお船の場合、2・3月に出漁した船は、10月頃までカツオの群れを追いかけながら北上する²²⁾。「お父さんは十月になったらもどるから」と父が漁を終えて帰宅するのを待ちわびる一文も見られた。子どもたちの飾るところのない文章からは、父が離れて働く家庭の寂しさや、土産を心待ちにする強かさが窺える。統計上の数字を並べるだけでは知ることのできない、当時の生きた家庭の様子を伝える資料だ。

● 管理規程との関係 ●

「文集」の項（27頁）を参照。

保護者の多くが漁業に従事

「昭和五十七年度以降 児童名簿」（大津小資料）



昭和 61 年度 児童名簿 大津小学校						
学年	氏名	性別	生年月日	入学年月日	職業	住所地
1	○○○○	女	55.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
2	○○○○	男	55.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
3	○○○○	男	55.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
4	○○○○	女	54.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
5	○○○○	男	54.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
6	○○○○	女	54.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
7	○○○○	-	52.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
8	○○○○	男	51.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
9	○○○○	男	51.1.1	56.2.1	漁業	○○○○
10	○○○○	女	51.1.1	56.2.1	漁業	○○○○

学校では毎年度、在学の児童・生徒名簿を作成する。資料の表紙には昭和 57 年度以降と記載されるが、昭和 56 ~ 平成 3 年度（1981 ~ 91）の 11 年間に作成された児童名簿が綴じられている。各年度の児童名簿には、在学児童の学年・氏名・性別・生年月日・入学年月日・保護者名・住所等が記載されている。また、新入学予定児童が記載されている土佐清水市教育委員会作成の就学児童名簿も昭和 61・62 年度分が綴じられている。

（土居喜一郎）

資料の ツボ！

児童名簿には保護者名や住所が記載されており、在学児童の兄弟（姉妹）関係も見ることができる。例えば、休校間近の平成元年度の大津小の児童数は 7 人であるが、世帯数としては 4 世帯のみとなっており、大津小校区において子どものいる世帯が少ないことが窺える。また、昭和期の児童名簿や就学児童名簿には保護者の職業が記載されており、興味深い。大津小の場合、「漁業」「船員」「渡船業」等が見られ、保護者の多くが水産業に関わる仕事に就いていることが分かる。本資料からは、在籍児童の情報だけでなく、その家庭の状況等が分かり、地域の状況も垣間見ることができる。

● 管理規程との関係 ●

児童名簿など学籍に関する書類は「2 教務②学籍」に分類される。卒業証書授与台帳は永年保存、指導要録（学籍）は 20 年保存されるが、その他多くの文書は保存年数 5 年である。

地域史を掘り起こす教員たち

「土佐清水のくらし」(大津小資料)



土佐清水市教育研究所と「土佐清水のくらし」研究委員会によって、編まれた社会科の副読本。昭和50年（1975）が初版で、本書はその5年後に発行された改訂版である。小学校3・4年生を対象とし、構成は、3年生向けの「私たちの土佐清水市」「市のひととのくらし」「店のしごと」「山にかこまれた土地のくらし」「わたしたちの市のうつりかわり」、4年生向けの「すみよい市をつくる」「市役所のしごと」となっている。計154頁。（望月良親）

(望月良親)

資料の ツボ！

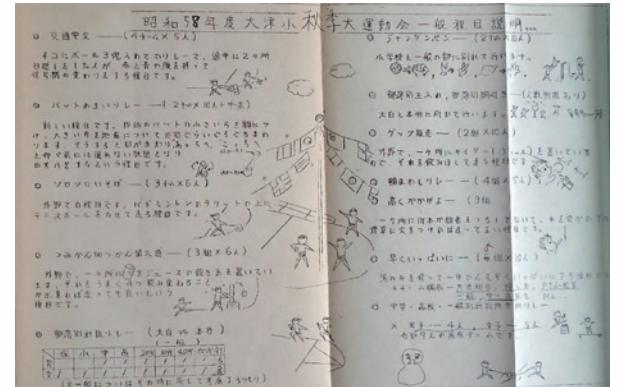
本書は「土佐清水市のくらし」と名称を変え、2011年までに7版を重ねる²³⁾。初版刊行の2年前には、土佐清水市史の編纂が本格化し、当該期に地域の歴史が掘り起こされようとしていた²⁴⁾。大津小に残された1983年の授業実践記録をみると、本書が利用され、1980年刊行の市史も引用され、指導案が作成されている。児童の学習後の作文も残されており、そこにも祖父から市史を借りて読んだと記される。大津小をはじめ市内の教員は、本副読本や市史編纂に関わっており、彼らの歴史への造詣の深さを感じ取れる。副読本収録の写真には、教員が午前1時に漁船に乗り込み、船酔いの中撮影したというエピソードも伝わっている²⁵⁾。

● 管理規程との関係 ●

「社会（郷土史）」の項（20頁）を参照。

ユニーク種目で盛り上がる

「運動会関係書類（昭和 57 年度以降）」（大津小資料）



昭和 57 ~ 60 年（1982 ~ 85）までの運動会プログラムや各種目の説明書など、運動会関係書類を綴じた公文書。収録された「昭和 58 年度秋季大運動会プログラム」からは、保育園児や中学生、さらには老人まで加わり、地域住民の参加協力で運動会が催されていたことが窺える。58 年度の大津小は女児 5 人しか在籍していなかったが、30 種目以上の競技と住民の参加によって運動会は盛り上がりを見せたであろう。（高木翔太）

(高木翔太)

資料の ツボ！

プログラムの各種目を見てみると、リレーに玉入れ、ソーラン節など現在も行われている競技の他、「ゲップ販売」や「高くかかげよ」など種目名だけでは不明なものが多々ある。しかし、収録された「昭和 58 年度大津小秋季大運動会一般種目説明」によって、「ゲップ販売」はサイダーを飲みほした後に走る競技で、「高くかかげよ」はタバコをくわえたまま、吊るされた線香の場所に行き、手を使わずにタバコに火をつけた後に走る競技であることが分かる。部落別リレーなどの真剣勝負の競技の他、大人も参加するユニークな種目からはおそらく笑いが起こり、運動会の楽しい、おかしい一面が垣間見える。

● 管理規程との関係 ●

運動会関係の文書は「2 教務③行事」の健康安全・体育的行事に分類される。保存年数は3年又は5年。

コースを交通事情で変更

「PTA 文書綴（昭和 60 年度）」（大津小資料）

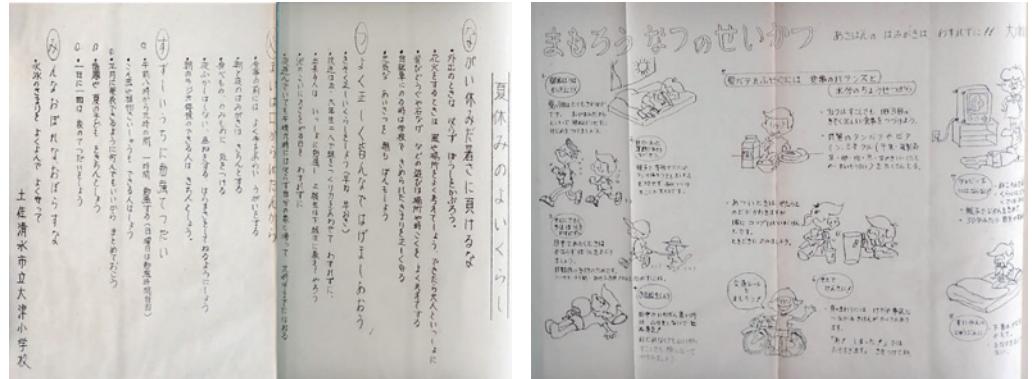


昭和 60 年度（1985）のマラソン大会など PTA が関係した学校行事の関係書類を綴じた公文書。資料によると、マラソン大会は昭和 61 年 2 月 9 日（日）午前 11 時開始。大津から貝ノ川（東）方面の海岸沿いを 1・2・3 年は 1.5 キロ、4 年は 2.3 キロ、5 年は 2.7 キロ、6 年は 3.5 キロを走ることになっている。道路工事車により交通量が増加しており、児童の安全を守るために、危険箇所に PTA 会員が配置されている。

（高木翔太）

上級生が担う役割

「夏休み関係書類（昭和 53～55 年度）」（大津小資料）



より良い夏休みの生活を送るために配布されたプリント類や、5・6 年生のみが参加した夏休みのキャンプに関する日程表などが綴じられた公文書。昭和 55 年（1980）の「夏休みのよいくらし」や、イラスト入りの「まもうなつのせいかつ」などが収録される。海が近い地域であるため、水泳の注意喚起の書類は多く、「みんなおぼれな、おぼらすな」というスローガンなど、学校側は水難事故が一番の心配であったことが窺える。

（高木翔太）

資料の ツボ！

大津小に残された「発送文書綴（昭和 58 年度）」という公文書からは、昭和 59 年のマラソン大会は大津から叶崎（西）方面に走っていることが分かる。翌年の大会も同様のコースであるが、先に見たように昭和 61 年は大津から貝ノ川（東）方面に変更されている。昭和 59 年の大会案内文には、「今年は、トンネル工事のためコースを西叶崎方面にかえました」とあり、そもそもは貝ノ川（東）方面であった可能性が推測できる。昭和 61 年 2 月には、大津と貝ノ川を繋ぐ貝ノ川トンネルが竣工しており、同時期には叶崎トンネルの工事も行われているので、狭い海岸沿いを走る工事車から児童を守る方法を考慮しながらマラソン大会が行われていることが窺える。

● 管理規程との関係 ●

「運動会」の項（33 頁）を参照。運動会と同様、健康安全・体育的行事に分類される。行事の運営方法や内容を決定するために参考されるのはせいぜい 2～3 年前までであり、行事関連の古い文書が残ることは少ない。

資料の ツボ！

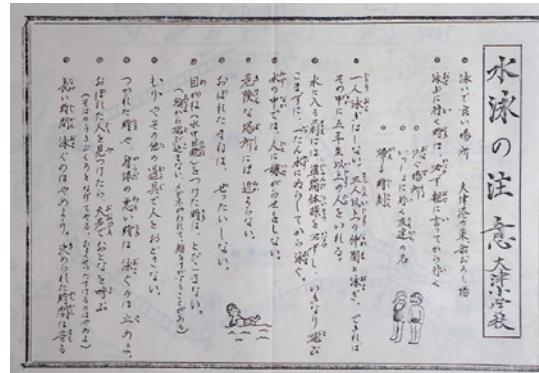
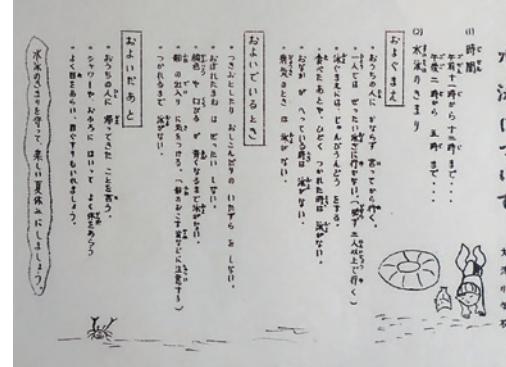
「夏休みのよいくらし」を見てみると、放送を 5・6 年生 2 人が力をあわせて忘れずに行うことになっている。これだけでは何の放送を行うのか分らないが、他の資料を参照すると、日曜日以外は午前 8 時から午前 9 時までを勉強時間としており、その勉強の始めと終わりに 5・6 年生が放送を入れることが決まっていたということが分かる。また、水泳の注意喚起には必ず上級生に行くという決まりもあり、上級生は下級生の面倒を見る責任を負っていたようである。少ない児童数の中、上級生は校区のお兄さん・お姉さんとして様々な役割を担って夏休みを過ごしていたのである。

● 管理規程との関係 ●

「学校通信」の項（15 頁）を参照。家庭・地域向けのおたよりは学校の意思を示す重要な書類であるが、発信元の学校では短期間（保存年数 1 年）で廃棄され、残らない。

プールがなかった大津小

「水泳に関するプリント」(大津小資料)



戦後、修学旅行中の高知市立南海中の生徒らが犠牲になった昭和30年（1955）の紫雲丸事故など、多くの水難事故が問題となった。

命を守ることにつながるとして、学校での水泳の授業とプールの設置が進められた。大津小には設置されなかった（貝ノ川小との合併理由の一つに同小のプール新設がある）が、水泳の訓練は必須のため、近くの海で授業が行われた。夏が近づくと、学校側も水難事故を心配し、様々な注意喚起をしている。

（高木翔太）

資料の
ツボ!

「水泳の注意」を見てみると、泳いで良い場所は「大津港の東、船おろし場」と決まっており、どこでも自由に泳いでも良いという訳ではなかったことが分かる。さらに、親に報告することや3人以上で上級生と一緒に泳ぎに行くことが定められている。また、夏休み前に配られた「水泳について」には、泳いで良い時間が記されており、午前11時から12時までと、午後2時から5時までである。楽しい夏休みにするためにも、水泳の決まりをしっかり守って欲しいという学校側の願いが伝わってくる。

● 管理規程との関係 ●

「夏休み」の項（35頁）を参照。

下川口地区の養護教員が協力

「腎臓」(大津小資料)



昭和61年（1986）9月、土佐清水市の下川口保健部会が作成した手作りのパンフレット。表紙には腎臓の機能を水道施設に見立てたイラストが描かれる。内容は、腎臓の位置や役割が分かりやすいイラストを用いて説明されたあと、検尿の目的（腎炎の発見）と採尿の仕方について記載される。採尿用の紙コップを配付する際、家庭向けの説明資料として一緒に配るために作成されたものであろう。

（目良裕昭）

資料の
ツボ!

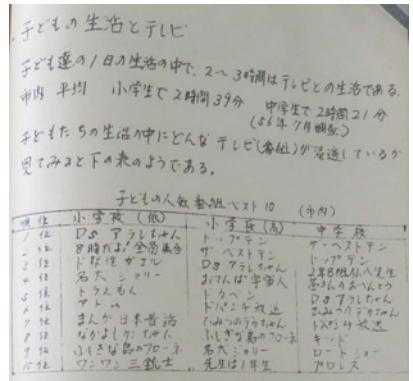
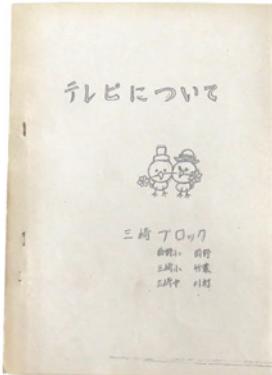
大津小には、①「すきな物だけ食べないで！」（栄養指導用）、②「カゼとインフルエンザ」（疾病予防用）といったパンフレットも残る。①は下川口地区の宗呂小で作成された資料であり、②の作成主体は不明だが、下川口地区の学校あるいは保健部会で作成し共有されたものではないだろうか。養護教員の仕事は、日常的な病気・ケガの応急処置、定期発育測定や検診の実施、保健指導や健康管理など多岐にわたる。高い専門性を求められるが、養護教員は殆どが学校に1名配置であるため、保健部会で協力して資料を作成したり情報を共有したりすることで、経験年数や学校規模の違いを補い、皆で業務の質を高めていったと考えられる。

● 管理規程との関係 ●

保健関係文書は「2教務⑦保健」に分類され、保存年数は3年又は5年。養護教員によって作成されたパンフレットや手引類は、内容を更新しながら継続して使用される場合もある。

弊害から子どもを守ろう

「テレビについて 三崎ブロック」(大津小資料)

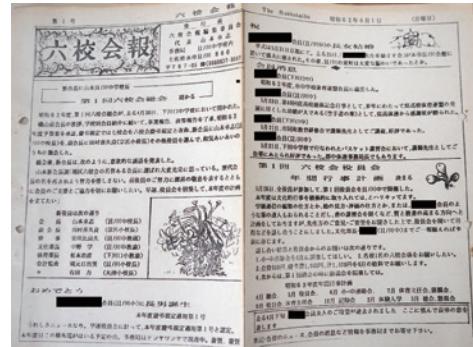


「テレビについて」と題された小冊子で、土佐清水市の三崎ブロックの教員が、テレビの歴史、実態、意義、害、これからの方針づけの5部構成でまとめたものである。発行年は不明で、「自閉症をひきおこすもと」「集中力 思考力が劣ってきた」などの「害」に、どう対応すべきかを考えようとした資料である。同じテーマで清水ブロックの教員が作成した小冊子に、昭和57年(1982)7月の日付があることから、同じ頃に作成されたと推測される。

(伊藤嘉高)

地域教育と親睦のため 7校で集う

「下川口地区七校会関係綴」(大津小資料)



下川口地区的7校(下川口小中・宗呂小・出合中・貝ノ川小中・大津小)に勤務する教職員で組織された七校会の文書綴。昭和62年～平成4年度(1987～92)の文書が保存される。出合中は昭和55年に廃校となるも、七校会の名称はその後も使用されたが、昭和62年に六校会と改称。会則、慶弔規定、総会資料、会報、六校の児童生徒が参加する音楽会・陸上記録会の書類、教職員参加の体育研修会や釣り大会の案内文書が残る。

(目良裕昭)

資料の ツボ!

テレビ開局から30年を経て、テレビ視聴が子どもに与えている弊害から守ろうという論調で書かれており、当時のテレビに対する学校の問題意識が窺える。大津小でも「ほけんだより」で児童、保護者に対して注意喚起を行っている。ただし、自閉症は先天的な脳機能障害であり、集中力・思考力の劣化についても因果関係は明らかでなく、現在では否定され、科学的根拠が薄弱な観点からテレビを害悪と論じている。資料で興味深いのは、昭和56年(1981)年7月の調査で、市内の小中学生のテレビ視聴時間だけでなく、どのような番組を特に見ていたかが分かることで、テレビ受容の実態を知ることである。テレビアニメは「まんが」と表現されている。

資料の ツボ!

六校会の目的は「会員相互の親睦と研修をはかり、地域の教育・文化の発展に寄与する」ことである。文化部と体育部があり、昭和62年度にはそれぞれ図画指導勉強会(10月)、釣り大会(9月)を企画し、教職員の研鑽と懇親の場を作っていた。文化部は六校音楽会(11月)、体育部は陸上記録交歓会(10月)の企画運営も行い、集団活動の少ない小規模校の児童生徒が大きな舞台で活躍し交流する機会となっていた。教育委員会主催でなく、会員の議決と会費によって運営される自立的な会が文化的・体育的行事を主催する例は希少である。会報には、会員の慶事や消息も掲載され、教職員が六校会を通じて家族的な関わりを持っていたことを窺わせる。

● 管理規程との関係 ●

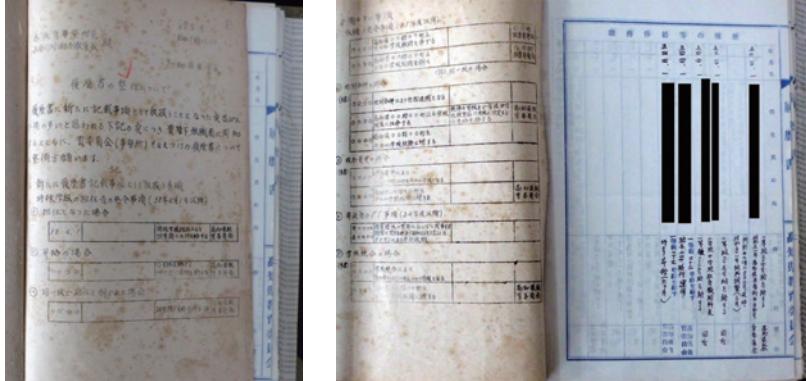
教育研究所主催の教育研究会(「理科」の項(19頁)を参照)の関連部会などの自主的な会なのは不明である。「2教務④研究」又は「2教務⑦保健」に分類される文書で、保存年数は3年又は5年。

● 管理規程との関係 ●

地域や校区の学校連携に関する文書は「5涉外②諸団体」に分類される。保存年数は1年。また、音楽会や陸上記録会など行事関係は、「2教務③行事」に分類され、保存年数は1・3・5年と自治体によって違がある。

一人一人の歩んだ歴史

「教職員履歴書綴」(大津小資料)



23人の教職員（教員21人、事務職員2人）の履歴書をまとめたもの。項目は、住所（本籍・現住所）、氏名、生年月日、続柄、旧姓、資格、賞罰、学歴、職務給料等の履歴などから成る。職歴で最も古いものに、昭和18年（1943）に月灘村（現大月町）周防形国民学校の助教に任命されたというものがある。個人情報が記載されているため、取り扱いに慎重さが要求される資料である。

（橋本達広）

資料の ツボ！

履歴書は個人の人生の縮図とも言われる。大津小に保存される23人の履歴書からは、一人一人の歩んだ歴史を知ることができる。また、その時代の教育施策や教育に関する法令も知ることができる。履歴書の記載内容に影響を与えた法令としては、戦後混乱期に限って見ると、昭和21年の公立学校官制の一部を改正する勅令（勅令第334号）、官吏俸給令（勅令第192号）、教職員ノ除去、就職禁止及復職等ノ件（勅令第263号）、22年の学校教育法、学校教育法施行規則、23年の教育委員会法、政府職員の新給与実施に関する法律、24年の教育公務員特例法などを挙げることができる。個人の歴史だけでなく我が国の学校教育の歴史も知ることができる。

● 管理規程との関係 ●

履歴書は「3人事①人事服務」に分類される。市町村をまたいで異動する小中の教職員は、新規採用時に作成した履歴書を追記しながら退職まで使用する。学校は異動した教職員の履歴書写しを永年保存する必要がある。

復員校長、 教員組合の結成を準備

「職員出勤簿 T.8～S.26」(大津小資料)



戦前から戦後間もない時期の大津小に勤務した職員の出勤簿綴。合綴される「職員出勤簿取扱心得」には出張や欠勤の内容に関する詳細が記され、出勤簿には「徴兵検査、簡閑黙呼、勤務演習、（後略）」といった「兵事召集」についても記載することとされていた。また、天長節や紀元節は「休日ニ関スル件」（昭和2年勅令）に基づく休日のはずだが、職員が出勤していることから学校で国家神道関連の行事が行われていたのではないか。

（目良裕昭）

資料の ツボ！

昭和20年（1945）4月7日、大津小に着任した溝渕清猪校長は、29日の天長節にも出勤し、5月に入ると下川口や中村へ出張、清水の校長会にも出席するなど校長職務を遂行している。しかし、6月14日に「応召」され、出勤簿はそれから約3ヶ月間空白となる。召集の内容は不明だが、9月16日に「復員帰還」を果たしている。翌年1月29日には「渭南教員組合準備委員会」出席のため清水へ出張し、2月23日に「渭南教員組合総会」に参加している。GHQによる教員組合結成の指令を受けた動きと考えられる。戦前から戦後の混乱を乗り越え、激変する教育政策に対応し、新しい教育を進めようとする校長の姿が出勤簿一枚から浮かび上がる。

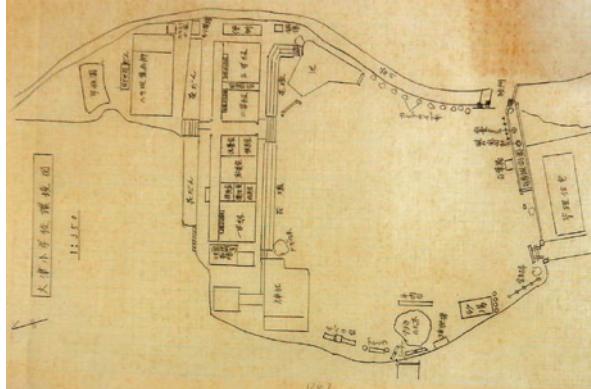
● 管理規程との関係 ●

● 管理規程との関係 ●

出勤簿は「3人事①人事服務」、出張関係書類は「3人事③旅費」に分類され、保存年数は5年。

昔の学校の姿を復元

「大津小学校環境図」（大津小資料）



大津小校内の手書きの1/350の見取図。廃校となって詳細の分からず学校の様子を知る記録資料として貴重である。校舎内には、3つの教室や職員室、図書室などが記され、屋外には給食を作る炊事場や講堂としても使われたであろうへき地集会所、菜園とみられる学校園も描かれている。校庭には銅像や池、遊具、百葉箱、花壇などがあり、管理住宅（教員住宅）も記されている。昭和後期ごろに作成されたものか。

（楠瀬慶太）

全国で使われた考古学教材

「古墳時代文化遺物模型」（大津小資料）



古墳時代の出土遺物（4～7世紀）の模型20点が並ぶ。鍔形石（大阪・黄金塚古墳）や銅鏡（京都・妙見山古墳）、鐵槍（三重・石山古墳）、鈴杏葉（愛知・大塚古墳）、子持勾玉（千葉・市之台）、杏葉（宮崎・西都原古墳）など日本各地の遺跡出土遺物が模型の形で再現されている。全国で古墳時代の文化を知る学校の社会科教材として使われた。なお大津小資料には「日本遺物模型」「人体寄生虫模型」なども残されている。

（楠瀬慶太）

資料の ツボ！

施設・備品に関する資料は、昔の学校の姿を知る基礎的な資料となるものである。大津小資料には、「大津小学校平面図」「配置図」などの図面類のほか、学校備品をリスト化した「備品台帳」、「教材備品一覧表」「理振備品一覧表」、学校の改築に関する文書類「学校改築関係書類」、大津小学校の文字が印字された児童用の雨傘（昭和60年・1985）など昭和期の資料が残されていた。施設は改変され、備品などは劣化して廃棄され、当時の姿では残らないため、こうした資料が当時の学校の環境や施設の歴史を復元する資料となる。

資料の ツボ！

日本最初の考古学模型は、研究者の指導で作られた明治33年（1900）発売の『歴史教授用標本』の「太古遺物之部」と「埴輪土偶模型」で、考古学ブームがあった大正時代～昭和初期には、京都の島津製作所などが模型を発売した。戦後は昭和30年（1955）代以降、採用される遺物が定型化した類似模型が各社で販売されるようになったという²⁶⁾。昭和30～50年代の高知では、考古学者の岡本健児氏らが県内遺跡を次々調査し、新聞等で成果が報道され、縁遠かった遺跡や遺物が一般にも知られていった。地域の考古学情報が、授業で模型を使いながらどのように子どもたちに伝えられていたのか気になるところである。

● 管理規程との関係 ●

施設台帳は永年保存又は常用。備品台帳は永年保存又は常用、単年度更新（5年保存）と違うがある。施設台帳は古い時代の分も残っていることが多く、増改築の様子などが分かる。

● 管理規程との関係 ●

備品管理は基本的に現有管理であり、破損又は老朽化すれば廃棄される。模型などは長く残る傾向にあるが、学習指導要領の改訂などで扱われなくなれば不要とされる。

地域の自然環境示す 採集データ

「生物標本」(大津小資料)



理科準備室から、海産無脊椎動物と魚類の液浸標本が見つかった。いくつかの標本には、採集地および採集日他の情報が記されたラベルがはがれずに残っていて、昭和49～55年（1974～80）に大津海岸で採集されたものだと分かった。また職員室からは、採集データを記したラベルが付いている植物のさくよう標本（押し葉標本）、昆虫標本も見つかった。他に校長室と廊下には、住民寄贈のウミガメの剥製や外国産の蝶の標本が残されていた。

（谷地森秀二）

資料の ツボ！

理科準備室に残されていた液浸標本群。これらは授業やクラブ活動などで作製されたものであろう。採集データが記されたラベルが残っていたことがツボである。なぜなら、そこに書かれた年月日と場所名から、学校活動ならびに採集当時の土佐清水市大津地域の自然環境を示す重要な証拠となるからである。残されていた標本は38点であったが、残念ながら半数近くが、保存液が蒸発して乾燥してしまったり、腐敗して形が崩れてしまったりしていた（残る標本は保存処理済）。高知大学の研究者にこれらの標本を確認していただいた結果、いくつかの個体に関しては「あまり見たことがない大きな個体」、「共生生物が見つかった」などのコメントをいただいた。

● 管理規程との関係 ●

学校では、児童生徒や住民が標本調査によって採集した植物や昆虫、岩石等の標本を理科室に保管したり、住民から寄贈・寄託された剥製を陳列したりすることがある。管理が十分でない場合が多く、経年劣化し、来歴も不明になるといった例はままある。

人気の献立や物価が分かる

「給食実施簿」(大津小資料)

大津小には、大津保育園で供された昭和40～50年代の給食実施簿が残されている。給食の献立を見ると、その時代に子どもに人気のあった食事や、食育の侧面から郷土料理が判明する。大津保育園では、カレー汁が人気だったようで、たびたび記載されている。また、保育園ならではの間食（おやつ）についても判明する。さらに一人分の費用など細かい情報やその時代の物価についても分かる。

（石畠匡基）

給食実施簿									
月	日	曜	給食内容	料金	備考	月	日	曜	給食内容
昭和40年	2月	木	ごはん	15		昭和40年	3月	水	ごはん
	15		ごはん	15			16		ごはん
	16		ごはん	15			17		ごはん
	17		ごはん	15			18		ごはん
	18		ごはん	15			19		ごはん
	19		ごはん	15			20		ごはん
	20		ごはん	15			21		ごはん
	21		ごはん	15			22		ごはん
	22		ごはん	15			23		ごはん
	23		ごはん	15			24		ごはん
	24		ごはん	15			25		ごはん
	25		ごはん	15			26		ごはん
	26		ごはん	15			27		ごはん
	27		ごはん	15			28		ごはん
	28		ごはん	15			29		ごはん
	29		ごはん	15			30		ごはん
	30		ごはん	15			31		ごはん
	31		ごはん	15					

昭和41年2月の給食実施表									
月	日	曜	給食内容	料金	備考	月	日	曜	給食内容
昭和41年	2月	木	ごはん	15		昭和41年	3月	水	ごはん
	15		ごはん	15			16		ごはん
	16		ごはん	15			17		ごはん
	17		ごはん	15			18		ごはん
	18		ごはん	15			19		ごはん
	19		ごはん	15			20		ごはん
	20		ごはん	15			21		ごはん
	21		ごはん	15			22		ごはん
	22		ごはん	15			23		ごはん
	23		ごはん	15			24		ごはん
	24		ごはん	15			25		ごはん
	25		ごはん	15			26		ごはん
	26		ごはん	15			27		ごはん
	27		ごはん	15			28		ごはん
	28		ごはん	15			29		ごはん
	29		ごはん	15			30		ごはん
	30		ごはん	15			31		ごはん

資料の ツボ！

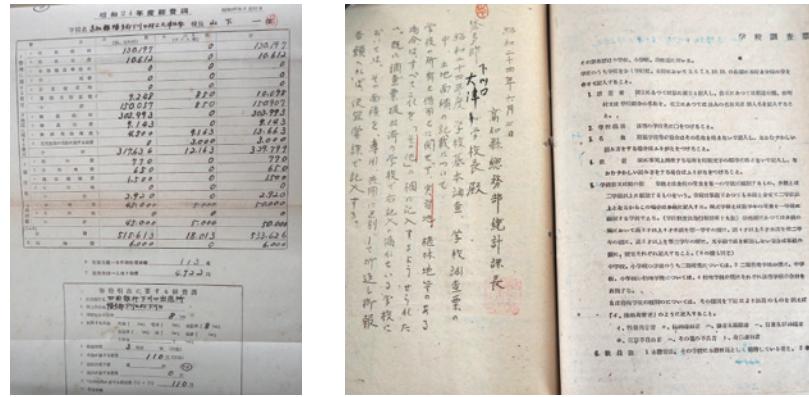
児童生徒に栄養とバランスのとれた食物を摂取させ、心身の健全な発達を図ることを目的に、学校給食が始まられた。日本では、明治22年（1889）山形県鶴岡町（現鶴岡市）で、仏教者が慈善事業として児童に昼食を給与した事例が最初とされる。国は昭和7年（1932）に「学校給食臨時施設方法」を定め、国庫から補助金を支出して児童の栄養改善を企図し、昭和15年には「学校給食奨励規定」を制定。しかし、翌年の太平洋戦争によって中止された。終戦後の昭和21年12月に社会復興の過程で学校給食は再開され、昭和29年に学校給食法が施行される。

● 管理規程との関係 ●

給食実施に関する文書（献立表や給食日誌など）は「4 財務②給食」に分類され、保存年数は3年又は5年。

学校経費の調査と実態

「指定統計関係文書（S35以降）」（大津小資料）



昭和35年（1960）以降の指定統計関係文書綴となっているが、昭和20年代の学校基本調査の調査票の控え等があり、昭和20～40年代の指定統計（現在の基幹統計）の調査資料が綴じられている。下川口村立時代も含めて大津小の予算執行状況が分かる資料である。歳出に対し、国庫や市町村支出金、PTA寄付金がいくら充當されているか、児童一人当たりの経費などが分かる。また、大津国民学校時代の便箋も綴じられている。

（伊藤嘉高）



学校の予算に関する資料としては、実際に予算の要求（申請）、執行、決算（実績報告）に関する文書等と統計調査への回答などがある。大津小資料においても、前者は、予算関係の文書綴や昭和57年度から平成元年度までの「予算支出票（執行）綴」、実際に帳票を入れて執行管理したと思われるファイル等が残されている。ファイルからは、実際の管理状況が分かる。後者は、学校基本調査での学校経費調査や地方教育費の調査等で、回答の控え、説明書と合わせて、通知文書も残されている場合、学校の予算だけでなく、調査過程も分かる資料である。

● 管理規程との関係 ●

学校基本調査は「1 総務③調査統計」に分類され、保存年数は5年。「4 財務③予算」に分類される予算関係文書には予算要求や執行、物品購入にかかる書類などがあり、保存年数は5年。

学校整備に動く昭和のPTA

「土地売買仮契約書」（中川内小中資料）

昭和35年（1960）1月、PTAと地域住民が取り交わした土地売買の仮契約書。PTAが校区内の字ガンドの田地を30万円で買い取るという内容。その目的は、「学校要覧」に「運動場拡張の計画は数年来あったが、その拡張予定地購入のための換地としてガンドに水田1.5反購入し、その中8畝を運動場に使用している」と特記されるように、運動場用地に転用するためであった。重要な書類のためか、永年保存の「学校沿革史」に綴じ込まれている。

（目良裕昭）



PTAとの仮契約から約半年後、室戸市が公費で字ガンドと周辺の土地を運動場用地として買受ける仮契約を締結する。校区には中川内小中学校運動場設立促進委員会が組織されており、PTAや住民の思いが行政を動かした側面もあるようだ。PTAの学校協力は、他にも出役で正門と裏門の通路を拡張したという記録も残る（昭和33年度学校要覧）。大津小資料にもPTAが学校環境整備等に関与していた記述が散見される。令和2年（2020）からの新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて地域と学校の連携・協働の重要性が語られるが、PTA関係資料には学校教育の今日的課題を解決するヒントが数多く含まれている。

● 管理規程との関係 ●

PTA文書は「5 涉外①PTA」に分類される。保存年数は自治体によって隔たりがある（1・3・5・必要年数）。規約や重要書類は引き継がれていくことが多い。

出身者と故郷をつなぐ絆

「叶崎便り」(大津小資料)

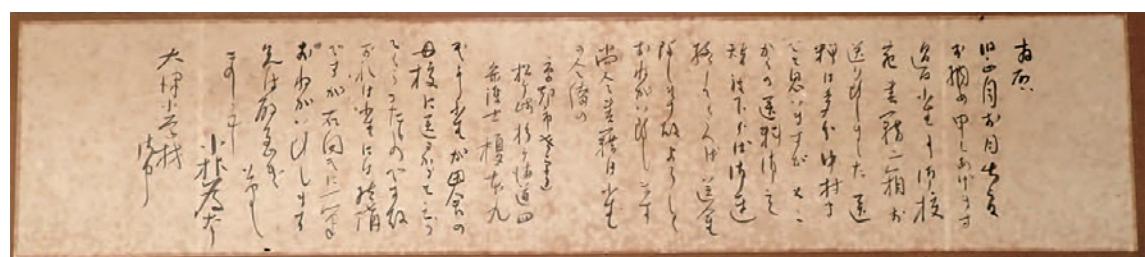


大津小に事務局を置く校友会が、昭和43年（1968）6月から平成5年（1994）3月の休校まで76号にわたって地域外の卒業生や関係者に郵送していた校友会誌。地区内の景勝地の岬「叶崎」（かなえざき）が会誌名となっている。住民の結婚・出産・逝去、大敷網漁や地域の様子、学校の行事や出来事、子どもの作文や校友会員の投書など大津地区の情報が詳しく記されている。執筆は主に大津小の校長らが担ったようである。

（楠瀬慶太）

上岡龍太郎の父と大津

「小林為太郎・図書寄贈の手紙」(大津小資料)



京都で活躍した人権派弁護士・小林為太郎（タレント・上岡龍太郎の父）が、昭和40年代に母校大津小に寄贈したダンボール2箱の書籍に同封されていた手紙である。同僚の榎本弁護士に書籍の郵送を依頼した。それが恐らく中村までの送料しかなく、大津小校長に一旦学校で送料を立替てもらえば、後でそれを送金すると記している。多忙な中を走り書いており、日々の生活の中に故郷・大津が原点としてあったことを裏付ける資料である。

（田村公利）

資料の ツボ!

大津小には戦前から校友会があり、「叶崎便り」以前から校友会誌「黒潮」、学校通信「大津だより」を学校が中心になり発行していた²⁷⁾。大阪方面への出稼ぎや集団就職で地区を離れる人が多かった漁村・大津。出身者すなわち学校の卒業生と故郷をつなぐ絆の一つとして校友会は長い歴史を紡いできた。出身者は子どもや地区の様子を「叶崎便り」で知り、故郷への思いを強くしたことだろう。また、同時に地域の暮らしや出来事の記録者としての役割も「叶崎便り」が担った。地域の情報を発信し、人々の心をつなぐ校友会誌の資料的価値は高い。地域における学校の役割の大きさを感じる資料である。

資料の ツボ!

為太郎は大津小を大正9年（1920）に卒業し、苦学して京都府で人権派弁護士として活躍した著名なOB。故郷・大津をこよなく愛し、彼の心の拠り所であった。大阪大津叶崎会の相談役として弁護士活動の傍ら同窓会活動にも熱心だった。昭和41年（1966）から5年間毎年のように児童図書を寄贈し、その数は700冊余りに達した。小規模校の大津小の蔵書数が多いのはこのためである。学校では「小林文庫」と名づけ、児童や教職員が日々活用し、教育環境を高め、その効果を醸成していった。為太郎は、遺骨の一部を大津・叶崎の海に散骨することを遺言とし、家族によりそれが実行された。どこまでも故郷を愛した人物であった。

● 管理規程との関係 ●

学校関係者が立ち上げた校友会・後援会などの関係文書は「5涉外②諸団体」に分類される。

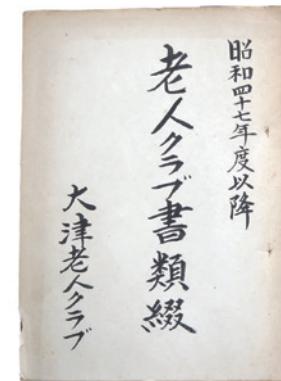
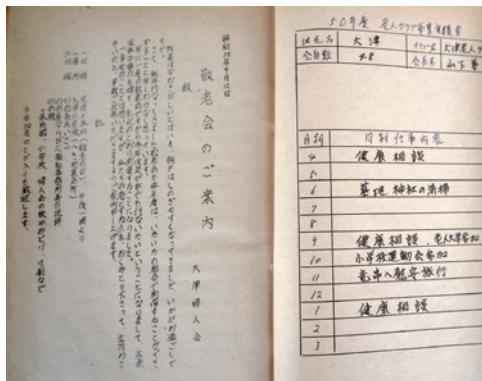
保存年数は1年。ただし、明確に規定していない自治体もある。

● 管理規程との関係 ●

著名な卒業生や地域の支援者からの寄贈品や支援に関する文書類は、管理規程に明確には規定されないが長期にわたり保存されることが多いと思われる。

昭和には 50 人の大所帯

「老人クラブ書類綴」(大津小資料)



高齢者の自主的組織「大津老人クラブ」に関する昭和47～52年（1972～77）の書類をまとめた綴り。運営基準（目的や組織、経理などを定める）、事業実績書（老人クラブ補助事業に関わって福祉事務所に提出した控え）、敬老会の案内文書、会員名簿などが綴じられる。活動は、「会員の教養の向上、健康の増進及び慰安並びに地域社会との交流を総合的に実施する」ことが運営基準に示されている。

（目良裕昭）

資料の
ツボ！

大津老人クラブは、昭和49年度には明治18～45年（1885～1912）生まれの50人が会員名簿に登載されている。健康相談（年3回）、地域の墓地・神社の清掃（年1～2回）、市民大学参加（夏季）、小学校運動会参加（10月）、慰安旅行（秋季）を定例の事業に、高齢者の健康づくりや助け合い・見守りを行う互助会的な機能を果たすとともに、ボランティア活動を通じて大津の地域社会に貢献していた。しかし、全国的な傾向として近年ではライフスタイルの多様化、人間関係が煩瑣になるなどの理由で入会を忌避する人も多く、60歳以上人口は年々増加しているにも関わらず、クラブ数・会員数は減少している。

● 管理規程との関係 ●

地域団体の文書を学校で收受した場合、「5 涉外②関係諸団体」に分類されるが、保存年数は1年である。長期間残ることは無い資料である。

大津保育園の実践記録

「昭和47年度 保育日誌」(大津小資料)

昭和47年（1972）4月1日～11月17日に

記された市立大津保育園（一時大津小横に併

設）の保育日誌。その日の実践の目的や方法、

園児の様子、感想のほか、開園・保育時間、

当日の出席者数、給食の献立が記されている。

ほとんどを「主任保母」が記入しており、所

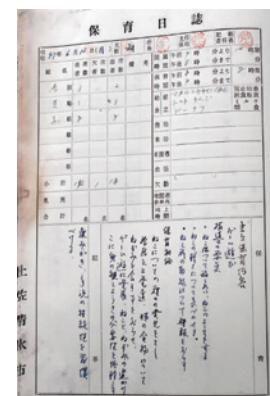
長の確認印もある。この年の園児は計13人。

6月1日に1人増え、計14人となっている。

母の日、父の日に合わせて絵を描くなど、時

節に合わせたイベントが多い。

（ 笹島康仁）



資料の
ツボ！

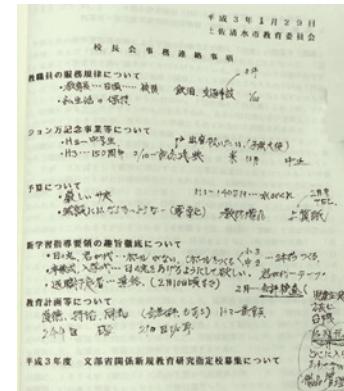
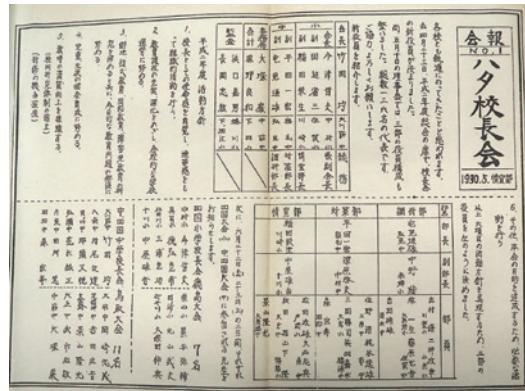
入園式から「お集まり」や挨拶、返事などを通じて、園児に集団行動や生活習慣を教えていく様子が記される。ネコについて考えたり、歯磨き・手洗いの重要性を教えたり、レコードを静かに聞いたり、演奏したり。保育士2人の教育的意図を読み取れる記述も随所にある。大津小資料に残る『保育二十年のあしあと』（高知県保母会編、1967年）には、隣接する大月町小才角地区的保育士の手記があり、保育とは単なる子守ではなく、「医学的知識、生理学、看護学」に精通することや「宗教的な考え方や、哲学的な、ものの見方等」を勉強することの大切さを説いている。土曜日の午後には保育士同士で「保育問題に火花を散らす」討論もしていたという。

● 管理規程との関係 ●

保育日誌の保存期間は3年又は5年と規定している自治体が多い。大津の保小が併設されていたために偶然残ったと推測される資料であるが、小規模の幼・保と小学校が併設される例は少なくない。

管理職の意識と取り組み

「校長会文書綴」(大津小資料)



平成2年度（1990）の土佐清水市校長会、幡多小中学校長会に関する文書綴である。前者は、土佐清水市教育委員会からの開催通知、校長会での連絡事項、会報、定期総会議案書、「日の丸・君が代問題」の資料などが含まれ、後者には会報誌『ハタ校長会』、研究大会清水大会の資料などが綴じられている。また、土佐清水市管理職教員組合の会報誌『市管教情報』や通知文書、幡多管理職教員組合の教育研究集会案内も綴じられている。

(伊藤嘉高)

これが非行の前兆だ!!

「少年補導関係（昭和53年度）」(大津小資料)



1970年代末期から1980年代、一部の中学校・高校で校内暴力の嵐が吹き荒れた²⁸⁾。そのため非行防止に関する資料が小学校にも配布されたようである。大津小資料には、高知県発行のパンフレット「青少年のための環境浄化県民運動」や土佐清水市防犯協会発行「防犯しみず」などを綴じた「少年補導関係」という資料がある。昭和53年（1978）は校内暴力の嵐真っ只中で、その芽をつぶそうとした努力を垣間見ることができる。

(石畠匡基)

資料の ツボ!

学校の管理職によって組織された校長会や教頭会の資料は、学校の所在する地域で、管理職がどのような課題意識を持っていたのか、取り組みをしたのかが分かる資料である。大津小資料には、土佐清水市、幡多地域の校長会、教頭会の資料が多く残されている。教職員の服務や予算関係、生徒指導、同和教育、休業中の対応など現在もある事項や、「日の丸・君が代問題」、「週休5日制」などの時事的な内容も含まれている。年数が経過すれば、現用の資料ではなくなるが、手書きメモもあり、当時の状況を知る手掛かりや証言となる資料である。

● 管理規程との関係 ●

市町村教育委員会が招集する校長会で説明・配付される資料については、「1 総務②総務」に当該年度保存すると規定する自治体もある。しかし、校長・教頭・養護教諭など職種別に組織される会の資料は、基本的に個人所有であって学校で保存されることはない。

資料の ツボ!

服装に非行化・不良化の前兆が現れるという考え方のもと、該当する服装をイラスト付で説明する。男子は、髪型は刈りあげてパーマをかけ、もみあげが長い。上着は丈が長く、ズボンはダブダブ。「外までイカって歩きグループで行動する」など服装以外の行動にも触れる。一方女子は、パーマで毛を染めている。スカートは丈の長さには触れない代わりに「腰のあたりで長くはいている」と履き方に触れる。このほか「男からもらった使い古しのカバンを持っているのが自慢」と、こちらも服装から外れる点も細かく指摘する。当時の大人が危険視した非行少年の姿を読み取ることができよう。

● 管理規程との関係 ●

児童生徒指導に関する文書は「2 教務①教務」に分類され、保存年数は3年又は5年。補導委員会や学校警察連絡協議会の文書を「5 涉外②諸団体」に分類する自治体もあるが、保存年数は1年である。

時代の要請に応え業態変化

「地区会要項」(大津小資料)

高知県学校生活協同組合（生協）が主催した

昭和51年度（1976）の地区会要項。生協職

員が県内各地に出向き、学校代表の生協係に

運動方針や商品供給活動、事務手続きに関す

る説明などを行い、意見・要望を聞く会である。

生協係に「積極的に注文をまとめる」役割が

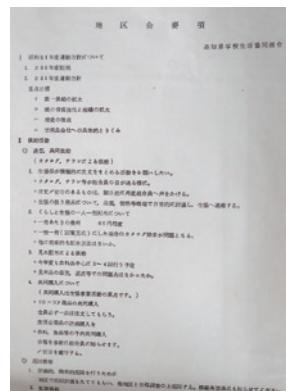
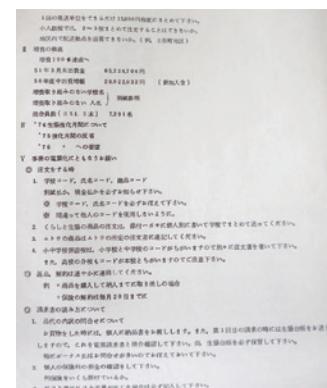
期待され、カタログ・チラシ等が組合員の目

に触れるように、注文締切日前の声かけ、商

品の品質・価格等を日常的に討議し生協に連

絡することが促進されている。

(目良裕昭)



学校生活を伝える1年の記録

「昭和53（1978）年度学校行事スナップ」(大津小資料)



39枚の写真が「鯉のぼり運動会 s53.5.1」「校庭のあこう s53.6.1」「叶崎の清掃 昭53.6.7」「七夕まつり s53.7.8」「たんじょう会 s53.7.18」「池のそうじ s53.9.5」「大津敬老会 s53.9.17」「親子研修（立石みかんがり）s53.12.4」「立石小と交かん会 s53.12.4」「きくといっしょ s53.12」「凧といっしょ s53.2.15」と題して綴じられている。卒業式、入学式は別途整理されていることから、教職員が記録として作成したものか。インデックスがつけられ記録性を意識している。（筒井秀一）

資料の ツボ!

昭和期のような生協係の活動は、学校文化や環境の変化、教職員の多忙化もあり、近年ではあまり見られなくなっている。一方で、生協は教職員に協力を仰ぐだけでなく、ニーズに合わせ、利便性を考えた商品開発やサービスを開拓している。昭和51年度は、電算事務（学校・氏名・商品コードの割り振り、請求書の電算化）導入の翌年にあたり、それまで筆記・手計算されていた注文や請求が電算化された。事務の合理化が図られたはずだが、要項に「他人のコードを使用しないように」「（生協台帳）を電算請求書と照合確認して下さい」とお願いが記され、十分には定着しておらず、一部混乱の生じていた状況が見受けられる。

● 管理規程との関係 ●

学校生協文書は文書分類に規定されず、收受回覧後は生協に返却又は廃棄される。

資料の ツボ!

デジタルカメラが普及して、無数ともいえる画像、動画が残されるようになったのは、いつごろからであろうか。昭和53年当時カメラは一家に一台程度普及していたとはいえ、フィルム・現像、焼付はそれなりに費用のかかるもので、先生が撮ってくれる写真は宝物であった。多くの学校で、入学式、卒業式等のかしこまった写真は残されていることと思うが、学校生活や「叶崎の清掃」など地域ならではの写真が丁寧に記録保存されていることは貴重である。大津小には翌昭和54年の学校行事、修学旅行のスナップや平成元年（1989）の校庭に「大つ」の人文字をつくっている航空写真なども残されている。

● 管理規程との関係 ●

写真や映像記録に関する明確な規程はない。アルバムに貼られた写真類は長く保存される傾向にあるが、映像記録は撮影・再生機材の更新（例 VHS テープ→メモリーカード）を契機に廃棄されることも多い。

教師から洋画家や国會議員へ

「集合写真」(高知追手前高資料)

明治 27 年（1894）の高知尋常中学校（現高
知追手前高校）の教員生徒の集合写真。鶴卵
紙に印画された写真が写真館のオリジナル台
紙に貼られ、それぞれの名前が記載された紙
が添付されている。この他にも同校には明治・
大正期の集合写真が多数残されているが、こ
のように人物名が判明しているものはめずら
しい。

（影山千夏）



資料の ツボ!

明治 7 年（1874）、変則中学時代の陶冶学舎を起源に遡れば、高知追手前高の歴史は約 150 年。
学校制度の改正に合わせて学校名は変遷しており、この写真が撮られた明治 27 年は高知尋常中
学校時代である。明治 19 年（1886）に制帽着用と校章が定められているので、着帽の男子が
学生であろう。日本洋画の草創期を支え高知の洋画家の先鞭となった楠永直枝や上村昌訓、『坂
本龍馬伝』を書き貴族院議員にもなった千頭清臣校長の姿などもあり、彼らがかつてこの場所で、
指導者として学生と共に過ごしていた日々のあったことがあらためて現実味を帯びてくるのであ
る。すでに薄くなっているこの写真、いずれ画像が消えていくのかと思うと忍びない。

● 管理規程との関係 ●

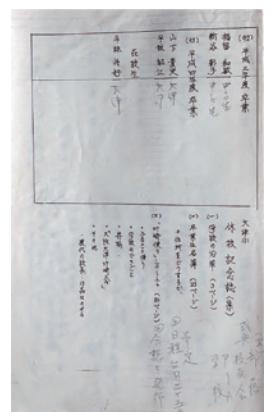
「行事写真」の項（55 頁）を参照。学級写真などの集合写真は、記録・照会用として年度順に整理・
貼付され、アルバムとして長く保存される傾向にある。

校史と節目を記録

「『大津小学校休校記念誌 叶崎』原稿」(大津小資料)

平成 4 年（1992）9 月大津小の休校が決定し、
当時の上岡忠紀校長が校務を縫い急ピッチで
準備を進め、記念誌を発行した。明治 8 年
(1875) 創立時から終戦までを年表で紹介し、
以降は昭和 43 年度から上岡茂晴校長らが
発行した「叶崎便り」を時系列に抜粋・掲載し、
校史の流れをカバー。学校と地区が一体で歩
み、地区外に転出した人々にも「叶崎便り」
が愛読され、心の故郷として親しまれていた
ことが綴られている。

（田村公利）



資料の ツボ!

閉校に関する資料は、学校の歴史とその節目を記録した重要な歴史資料である。資料などによる
と、大津小の平成 5 年度在校生は 3 人で新入生ではなく、土佐清水市教委は近隣の貝ノ川小との統
合を大津地区に相談した。この件は地区外の同窓生を含めて検討され、地区外からの出身児童迎
え入れ案も浮上したが保護者の賛同を得ることができず断念した。市教委は、経済及び教育的効
果や市議会教育民政委員会の「小規模校統合推進決議」、貝ノ川小新校舎落成、貝ノ川トンネル
開通などで統合条件が一定整備されたのではないかと統合を地区に打診。結果、打診を受け入れ
平成 5 年 3 月末をもって休校となった。

● 管理規程との関係 ●

休廃校となった学校の重要文書は、統合先があればその学校に引き継がれる。無ければ教育委
員会事務局等で保管されるが、いずれにしても休廃校によって多くの学校資料が廃棄されてい
る。

理想とされた子どもの姿

「図案集」(吉岡文葉堂資料)



戦前に高知市堺町にあった文房具店「吉岡文葉堂」が取り扱っていた学校向けのポスターや教授用資料などの29枚の図案集。大正9年(1920)に制定された「時の記念日」の図案があり、戦中期の要素を強く感じさせるものはないため、大正後期から昭和初期に使われたものと推定される。当時高知の学校で使用・掲示されたであろうカット図案や運動会、生活習慣の啓発ポスター等を知ることができる。

(永野勇太)

元校長や市民による法制化反対運動

『教育通信〔幡多版〕』(大津小資料)



戦後、学校において「日の丸・君が代」をどう扱うのかという問題について大きな対立が続いた。平成11年(1999)8月に国旗・国歌として法制化されるまでの過程で、特に激しい議論が巻き起こった。これらの動きは、大津小とその地域にも波及している。同校に残る『教育通信〔幡多版〕』(高知県教職員組合発行、1991年)などから幡多地区での「日の丸・君が代」押しつけ反対の取り組みの動向を知ることができる。

(小幡尚)

資料の ツボ!

例えば「訓練事項ポスター」は、走らず静かに左側通行することを啓発し、全ての人が規則を守り、時間厳守で集合とする。また、「衛生ポスター」は、垢や汚れを落とし、身体の清潔を保つことを諭し、不潔は恥だと説く。これらは、集団生活での規則や個人の生活習慣を習熟、実践する態度を身に着ける際の中心的役割を担ったのだろう。近代社会において、学校こそが子どもに教育を施す主体であるという意識が浸透する中で²⁹⁾、平時の状況にあって、教育によってどのような子どもの姿が理想とされたのか、その一端が垣間見える資料の一つだ。

資料の ツボ!

学校資料は「学校の歴史」を知るために有用なわけではない。学校がある地域の歴史、さらに日本全体の動きについて考えることができる場合もある。「日の丸・君が代」反対運動の資料は、そのような広がりのある資料の一例といえる。写真の『教育通信〔幡多版〕』1021号からは、1991年2月に「日の丸・君が代の押しつけに反対する幡多地区父母と市民の会」が結成され、郡内の教育委員会等への申し入れを行うなどの活動を展開したこと、元校長74氏が連名で押しつけに反対するアピールを発表したことなどを知ることができる。

● 管理規程との関係 ●

学校には水難や交通事故等の注意喚起、生活・環境問題等の啓発、私立学校の広告など様々な種類のポスターが届く。校内で選別・掲示されたあとは廃棄され、残ることは無い。

● 管理規程との関係 ●

教職員組合が発行する機関紙・通信類は、活動の紹介や問題提起を目的として組合員から教職員向けに不定期に配布される。

卒業生の力も借りて観光振興

「叶崎保勝会記録綴」（大津小資料）



昭和 30 年（1955）、足摺岬などが国定公園に指定された土佐清水市は、県内有数の観光地として発展した。当時、景勝地「叶崎」を有する大津でも観光による地域の売り出しの動きがあった。大津小資料には、大津地域の観光振興を目的に昭和 43 年（1968）に再結成された住民団体「叶崎保勝会」の記録綴が残されている。53 頁におよぶ綴には、保勝会の会則や会員募集のチラシ、足摺国定公園のパンフレットなどが綴じ込まれている。

（楠瀬慶太）



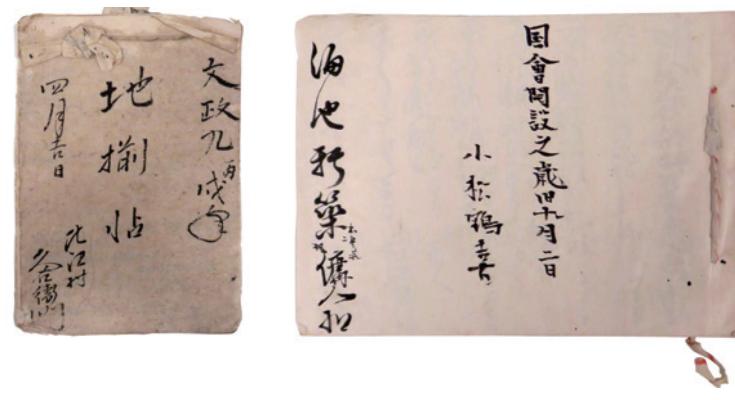
なぜ地域の観光振興に関わる資料が、学校に残されているのか。大津小は卒業生らで作る校友会の事務局を持ち、県外に住む卒業生に会報「叶崎便り」を送付していた。「叶崎保勝会記録綴」には、「叶崎便りへの寄附者御芳名」が綴じ込まれており、保勝会が校友会の事務局がある大津小に観光振興の活動への支援を求め、互いに連携を図っていたことが推測できる³⁰⁾。校友会を通して卒業生とつながる学校は地域の情報拠点であり、住民活動と深いつながりを持っていた。学校資料には、学校と地域のつながりや地域活動の実態を知る地域資料も多く含まれている。

● 管理規程との関係 ●

地域行事や地域連携の文書は「5 涉外②諸団体」に分類されるが、保存年数は 1 年であり、基本的には学校に残らない資料である。

地域の中心に集まった歴史資料

「地掲帖」「泊地新築ニ出足并雇人扣」（北陵中資料）



明治初期、地域に作られた学校にはコミュニティの中心としての役割が期待された。そのためか、学校と関係のない地域の古文書が校内に保管される例がある。しかし、収蔵の経緯が伝えられず、くずし字で記載内容が分からぬ理由で廃棄されることもある。各家や役所に関する文書でも、元の保管者は地域の歴史資料ということで地域の中心の学校に託したのかもしれない。古文書が出て来た時は博物館や資料館に相談してほしい。

（石畠匡基）



南国市の北陵中には、幕末から明治にかけての古文書が残っている。大半は校区の南国市比江の小松家に関するものである。残存状況から明治 20 年（1887）代には小松家から移管された可能性が高いが、収蔵経緯は不明である。資料から、小松家は庄屋といった地域の有力者とみられ、地域の中心である学校に収蔵されたのであろう。比江周辺の米・錢の貸付けや人足供出に関する資料に加え、小松家から師範学校を受験した人物の履歴書や試験問題、さらに学生時代の期末試験の解答用紙など学校に関わる資料も散見される。

● 管理規程との関係 ●

市町村立学校に開校以前の地域の古文書が保管されているという事例は極めて珍しく、管理に関する規定も存在しない。

第3章

学校資料を残す・伝える



第2章で学校資料がもつ面白さと重要性、学校にとどまらない様々な側面を有する資料であることを紹介しました。第3章では、学校資料保存の現状を「残す・伝える」の視点で整理し、県内の学校での資料の記録や保管、活用の事例を紹介します。

学校資料の残り方



閉校時の学校は、公文書や備品を整理して、統合先にそれらを移管するか、廃棄を迫られます。保存年限未経過の公文書や「学校沿革史」などの重要資料は、統合先に移管されることが基本です。また、備品などは、他の学校や同じ行政組織内で利用し、近隣住民に譲渡する場合もあり、利用できるものを引き継ぐということが行われています。

そして、保存年限が経過した本来であれば廃棄されているはずの公文書、この扱いが閉校時の学校資料における悩ましい問題になっています。明治期の公文書など、古い資料はなかなか廃棄という判断には至らないようですが、昭和・平成の公文書が閉校を機に廃棄されています。また、配布プリントや校舎内の掲示物など、これらも同時に廃棄されているという現状です（これらの中にも重要な資料があることは本書内で紹介しているとおりです）。廃棄自体が悪い訳ではなく、閉校まで様々な経緯や理由で残ってきたにもかかわらず、閉校時の忙しさとタイム

リミットが迫るなかで、評価選別（資料の価値や重要性の判断）をせずに廃棄が行われていることが問題であると言えます。

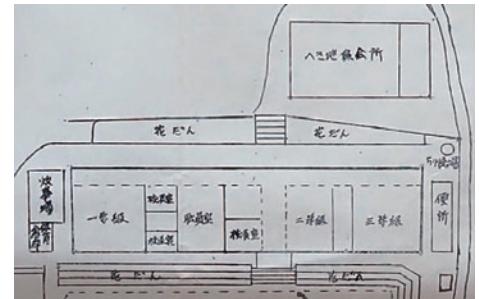
地域の記憶を伝える重要な学校資料を守るには、アーカイブズ機能を整備して、常日頃から組織的に資料を残さなければなりません。アーカイブズ機能が無いなかで、文書管理規程に則って正しい管理を行うと、保存年限が経過した公文書は廃棄されてしまいます（「残らない？残せない？学校資料」65頁参照）。

県内ではアーカイブズ機能の整備は進んでいませんので、学校資料は、教員や教育委員会等、学校関係者が残そうとする意志がないと、捨てられてしまっているという現状なのです。

こうした現状のなか、本書で多く紹介している土佐清水市の大津小資料は休校後に再開が望まれていたため、学校資料がほぼそのままの状態で残されてきた稀有な事例と言えます。これまで、閉校時に資料相談を受けて、

部屋名	件数
職員室	864
校長室	1712
休養室	223
保健室	320
放送室	5
校具室	53
理科準備室	364
用具室	416
一学級	1
二学級	0
三学級	0
玄関・廊下	204
不明	121
合計	4283

左) 表1 大津小各部屋の資料数 右上) 図1 大津小平面図(一部) 右下) 大津小校長室の資料保管状況



学校資料の保存に取り組むことはありましたが³¹⁾、その際には資料の廃棄が進んでしまっていることが多々ありました。

残された大津小資料で分析を行うことは、休廃校時の学校資料の残り方を総体的に知る上で重要なことであると考えます。しかし、現状では大津小資料の全体像を把握した上で分析が行える段階までには至っていないため、まずは大津小資料の残り方を簡単に紹介します。

大津小資料に残された平面図を見ると、西側から「一学級」「校具室」「放送室」「職員室」「校長室」「二学級」「三学級」があります。高知県の学校資料を考える会の調査時には、これらの部屋に加え、校具室と放送室の間に「保健室」、校長室の北側に「休養室」、二学級の東側に「理科準備室」、三学級の東側に「用具室」がありました。これらの部屋と玄関や廊下等に掲示および残されていた資料等も含めて、2020年6月の調査時は、計12の部屋・場所ごと、また各棚など資料が置かれている場所ごとに、

資料を箱に収めて搬出しました（「どのように整理・保管する？」68頁参照）。

資料点数は表1のとおりです。点数は、搬出後に移管した中浜小学校で各箱等の資料を数えた数値（資料点数を約として数えた箱もある）を、部屋・場所ごとに合算したものです。

調査時、二学級と三学級の教室には資料等がなにもない状況で、反対に一学級の教室には様々なものが置かれていました。しかし、教室の床が抜けていて調査および搬出が困難という問題もあり、レスキューしたのは高知県の立体模型のみでした。

出所が不明となってしまった資料は、運び出す際や車両での運搬、中浜小での整理の際など、これらによって出所が分からなくなってしまったものです。調査時は電気等がなかったために、カメラでの撮影に限界があり、出所の確認ができないこと（撮影した写真が不鮮明等）も原因になっています。

校長室の資料点数は全体の4割を占めており、続いて職員室が2割と、両部屋の資料が大津小の主となります。両部屋に残されていた公文書やプリント類、文集などを本書で多く紹介しています。休校記念誌の関係資料や卒業式告辞など、校長の仕事に関係するものが校長室に残っていたという当たり前と考えられることは現状でも言えますが、全体を網羅した上で特質や異なる点等までは分析は行えていません。

次に多い用具室には、運動会の用具類と思われるモノ資料もありましたが、昔は図書室（ここで紹介している平面図とは別の平面図に図書室と記載あり）であったためか、書籍類が多く残っていました。理科準備室は、標本などの教材資料が多く残っており、他の学校に引き継いで利用できたはずの備品ですが、休校で再開を望んでいた大津小であるが故に、残った資料であると言えます。

保健室には、児童および教員の健診関係とともに、日本脳炎やツベルクリンなどワクチン関係の資料や、テレビが身体にもたらす害などを記した保健だよりなど、個人情報の固まりといえる資料や当時の社会を反映するような資料が残されていました。個人情報資料をそのままにしておくことは現在では有り得ないですが、これもそのままの状態で残ってきたことを裏付けるものだと思います。

以上、調査時の印象と各部屋資料の概要を把握した段階では、職員室は少し片付けられたであろう形跡があり、校長室、理科準備室、保健室などはほとんどそのままの状態で資料が残ってきたと推測できます。校長室から、「学校沿革史」などの重要資料は見つからなかったので、重要資料のみ統合先の貝ノ川小に移管したと考えられます。

その後、各部屋の資料1点ずつのリストについても進めてきてはいますので、概要のみではなく、今後はそのリストを整備して、なお全体像を把握することが必要です。

この作業を行うことで、高知県内のへき地における、平成初期の学校が所有していた学校資料の実態が見えてくるのではないかと思われます。

(高木翔太)



大津小職員室からの資料救済の様子

残らない？残せない？学校資料 ～管理規程からみた資料保存～

「学校記念誌を作りたいが、肝心の学校に古い時代のことが分かる文書や写真がほとんど残っていない」「学校の伝統ある行事や取組について問い合わせがあったが、詳しい来歴が分かる資料は無い」・・・。学校に勤務する人であれば、一度は耳にしたことがある話ではないでしょうか。

学校資料の保存を考えるとき、整理・選別、管理方法、場所の確保とともに、管理規程が一つの問題となります。とりわけ、公立小中の場合は設置者である地方公共団体（市町村）ごとに規程が定められており、設置者の方針によって保存の在り方が左右される側面があります³²⁾。ここでは、高知県の公立小中における文書・備品の管理規程の運用に関する現況と資料保存の観点からみた課題を述べたあと、学校資料を残すためにできることは何かを考えます。

公立小中の文書管理は、令和3年度（2021）から統合型校務支援システム³³⁾に実装された文書収受機能の運用が正式に開始されたことにより、大きな転機を迎えます。①それまで市町村により異なっていた文書分類が大・中分類は統一され（表2）、小分類と保存年数は基本的に3パターンから一つを選択することとなりました。②紙媒体によらず文書収受機能により電子保存する場合は年数による分類のみとなり、大分類が電子媒体、中分類が常用（継続保存）・5年・即廃（0年）とされました。

大分類		中分類	
1	総務	①	経営
		②	総務
		③	調査統計
2	教務	①	教務
		②	学籍
		③	行事
		④	研究
		⑤	進路指導
		⑥	援助
		⑦	保健
3	人事	①	人事服務
		②	給与
		③	旅費
		④	福利厚生
4	財務	①	管理
		②	給食
		③	予算
		④	学校預り金
5	涉外	①	PTA
		②	諸団体

表2 公立小中の文書分類

①に関しては、分類の統一により業務の効率化が図られた一方、別稿³⁴⁾で課題として挙げたように、新しい分類でも現用文書の管理に主眼が置かれているため、永年保存される学校沿革史・卒業証書授与台帳などの一部を除き、ほとんどの文書は保存年数が5年までに設定されています。保存年数を過ぎた文書は「すみやかに廃棄する」ことを規定する市町村もあります。

さらに、今後の学校資料保存の大きな課題となるのは、②の運用と学校ICT化の進展です。教育委員会事務局と学校間の文書のやりとりは、基本的に文書收受機能によりクラウド上で行われるようになりました。また、教職員には一人1台のPCが貸与され、職員会議等の資料は校内サーバーの電子データを利用、プリント・通信類はPCで作成し電子保存するといった業務改善が各校で進められており、日々山のように収受・作成されていた紙媒体の文書が学校現場から急速に減りつつあります。文書收受機能で電子保存された文書は保存年数を過ぎれば確実に廃棄され、校内サーバーの電子データも容量の関係で古いものから消去されることが一般的であり、令和以降の文書は学校や自治体に残そうという意志が無ければ偶然に残ることはまずないでしょう。

次に、備品管理については、市町村の財務・物品等の管理規則に従うか、これに基づき学校備品管理に関する必要事項を規程として定めている自治体もあります。ただし、日常の使用・保管や定期検査の実施など現有備品の管理を意図した内容であり、破損や老朽化、学習指導要領の改訂などを理由に使用できなくなった備品は、不用決定を経て廃棄処分されます。備品を含む物品や施設設備には、そもそも資料や保存といった概念がないのです。

第2章では、掲載した53項目の資料に文書收受機能の大・中分類と保存年数（モノ資料除く）、学校現場での運用や慣例などを付記しましたが、学校沿革史や施設台

帳を除くほとんどの資料は管理規程に則れば廃棄されていたはずの資料です。それが残ったのは、偶然が作用した面もありますが、大津小の地域住民の熱意もあって休校が当初は一時的なものと想定されていた例のように、学校・地域として残す必要性や意志があったことが大きいでしょう。

学校資料を残すためには、現用・現有に特化した現在の管理規程を見直すだけでは限界があり、学校資料として何をどのように残すのかを異なる立場や視点から検討し保存していく仕組みづくりが必要と考えます。公立学校は国民の税負担によって成り立ち、保護者や地域住民の協力があって運営されている点に立ち返れば、学校教職員や市町村の学校教育担当者だけで議論するのではなく、社会教育や文化財、地域振興の担当者、さらには保護者（PTA）や学校関係者（地域住民や社会教育関係団体）らとともに熟議することが求められます。例えば、休廃校や校舎改築等を契機に学校が廃棄を検討している資料に関して、学校運営協議会や地域学校協働本部、文化財保護審議会といった場で保存や活用、移管等について検討・審議することができれば、自治体・地域・学校にとって重要な学校資料を残していくことができるのではないかでしょうか。

ただし、膨大な学校資料の中から保存する資料を選別・整理し、将来にわたって活用していくためには、管理規程とは異なる一定の指針や基準が必要です。この点に関しては、嶋田典人さんの学校アーカイブズ³⁵⁾、和崎光太郎さんの学校歴史資料の目録と分類（表3）³⁶⁾といった先行研究が参考になります。これからはデジタルアーカイブの視点も必要になるでしょう。また、特に公文書に関して個人情報保護の観点から残すことに懸念を覚えるかも知れません。学校に保存場所が無い場合も想定されます。これは、公開を前提とせず、市町村内のしかるべき場所（休廃校を利用する自治体もあります）に移管

するなど、学校資料をまずは捨てないことが重要です。学校や校区、地域の歴史を物語る貴重な学校資料について、それぞれの学校で何をどう残すのかを考え、守り伝えていく取り組みをできることから始めていきましょう。

（目良裕昭）

00 書籍類		04 生徒会・同窓会・PTA・部活動	
0001	学校記念誌・学区誌類	0401	生徒会発行物・製作物
0002	戦後検定教科書	0402	同窓会発行物・製作物
0003	国定期の教科書（1904～1948）	0403	PTA発行物・製作物
0004	国定期以前の教科書（～1903）	0404	部活動発行物・製作物
0005	副読本	05 生徒作品	
0006	参考書・問題集	0501	作文
0007	教科別研修資料など	0502	絵画
0008	学習指導要領	0503	習字
0009	一般書籍	0504	ノート・プリント
0010	その他印刷されたもの	0505	テスト
01 写真・映像		05 生徒作品	
0101	卒業アルバム	0506	日記
0102	記念発行のアルバム・絵葉書など	0507	その他生徒作品
02 文書		06 教材教具・指導関係	
0201	学校沿革史	0601	理科
0202	日誌類	0602	社会
0203	建築関係・校舎図面	0603	音楽
0204	学校運営関係	0604	算数・数学
0205	学籍簿（指導要録）・指導記録類	0605	保健体育
0206	地図（学区地図類を含む）	0606	幼児教育
0207	学区関係（青年団・夜学会などを含む）	0607	その他教材教具・指導関係
03 学校発行物・配布物		07 建築・鋳造物	
0301	学校発行物	0701	瓦
0302	通知表	0702	像
0303	証書・賞状	0703	その他建築・鋳造物
0304	運動会・発表会・修学旅行関係	0801	服飾・鞄・靴など
0305	その他生徒向け配布物	0802	考古
0306	保護者向け配布物	0803	民俗
		0804	給食
		0805	備品類
		0806	手紙類
		0807	その他

表3 学校資料の分類カテゴリー表（和崎 2017）

どのように整理・保管する？

～歴史学・保存科学のノウハウで資料を保存しよう～

【整理】リスト（目録）を作成して資料の全体像を把握する



資料を箱から出し（⑥）、ホコリなどをハケで取ってクリーニングしながら（⑦）、箱ごとに資料番号（例 32-1）を書いた付箋を挟んで（⑧）資料の表題を表計算ソフトに打ち込み、箱ごとに順番にリストを作っていく（⑨）。重要と思われる資料は撮影してデータを取って記録しましょう（⑩）。



2020 年度に私たちと土佐清水市教委などが、歴史学と保存科学のノウハウで行った大津小の資料整理から、職員室などに残る資料の整理・保管の手順を紹介します。

【搬出】資料を保管場所へ移動させる



棚など資料の配架状態を撮影し（①）、配架場所（例：職員室の棚）を記録して取り出し（②）、元の配架場所ごとに箱に入れ、仮番号を箱に書き運び出します（③）。保管場所では箱に蓋をする、薄用紙を掛けるなどして遮光し、湿気を防ぐため箱下にスノコを敷くなど直接床に置かないようにしましょう（④）。箱に入れたら、直接資料に触れないように防虫剤を入れて、虫害対策をしましょう（⑤）。光による紙焼けや虫が入るのを防ぐため蓋をしめて密閉して一時保管しましょう。



①

②

③

④

⑤



⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

【保管】保存環境を整えて資料が劣化しないように保管する



重要と思われる資料は、資料の劣化を防ぐ中性紙封筒に封入する（⑪）、中性紙保存箱に入れるなどして別置しましょう（⑫⑬）。箱に入れて保管する場合も、資料が劣化するため箱を開めるなど資料に直接光が当たらないよう遮光対策を行いましょう。資料を保管する部屋は、湿気があまりない場所が好ましい。湿気やホコリは、カビや資料を食べる虫を呼び寄せる要因になります。定期的に窓を開けるなど換気し、資料の周りはホコリがないように清潔に掃除しましょう。



⑪

⑫

⑬

【整理・保管の方法】

より詳しい学校資料の整理・保管の方法を記した『みんなで活かせる！学校資料―学校資料活用ハンドブック』（京都市学校歴史博物館、2019 年）、重要資料の保管方法をまとめた『高知の歴史資料を残す伝える』（高知戦争資料保存ネットワーク編、2019 年）の PDF データを高知県の学校資料を考える会のホームページからダウンロードできるようにしています。参考にしてみてください。また、教育委員会や学校、地域で学校資料の整理・保管を検討しているようでしたら、高知県の学校資料を考える会として支援ができますのでご相談ください。



高知県の学校資料を考える会 HP

(楠瀬慶太)

学校資料の活用

～空き教室やフリースペースなどを使って「ミニ学校博物館」に～



学校には様々なものが保管されています。意識的に残されたものもあれば、なんとなく残っているものもあるでしょう。それらは学校の歴史や社会の営みを物語るかけがえのない貴重な資料です。処分してしまうのはもったいないですよね。たとえば空き教室やフリースペースなどをを利用して、児童生徒や学校を訪れた方などが自由に見ることができるように展示してみてはどうでしょうか³⁷⁾。

展示する資料は、学校の歴史や児童生徒の活動の痕跡を感じられるもの、地域の文化を伝えるものなどを選ぶと関心を持ってもらえると思います。また、平面的なもの（文書類）や立体的なもの（剥製など）を織り混ぜると楽しいでしょう。展示品には、分かる範囲で結構ですので「資料の種類」「年代」「保管されていた場所」「資料の説明」など添えてみてください。一気に博物館らしく

なります。特別な展示壁面がなくても、机や椅子、黒板などを使って学校らしい展示ができます。ただし、直射日光は避け、転倒防止には配慮してください。そして時々、展示品を変えてみてください。展示品選びから、資料の調査などを生徒と一緒に行うと良いかもしれません。すでに役目を終えていたこれらは、生きた教材として新しい学習の機会を生み出すことにもなるでしょう。

写真は、高知追手前高の学校資料の展示風景です。明治の開校以来、同校には多種多様な資料が残されてきました。これらの資料を生徒が日常的に見られるように、その一部を階段スペースを利用して展示しています。校旗、鯨や猿などの剥製、明治時代の試験、実験教材など様々な展示品には、資料の年代や簡単な解説が添えられています³⁸⁾。（影山千夏）

【註・参考文献】

- 1) 高知県の学校資料を考える会編 2020 『シンポジウム高知県の学校資料を考える 記録集』
- 2) 楠瀬慶太 2021 「土佐清水市旧大津小学校の資料救済と調査」『こうちミュージアムネット通信』18
- 3) 2017年には横浜市でシンポジウム「学校資料の未来—地域資料としての保存と活用」(地方史研究協議会・横浜市歴史博物館共催)、2019・2020年には京都市でシンポジウム「学校資料の活用を考え—学校資料の価値と可能性」(京都歴史文化施設クラスター実行委員会主催)が開催されています。
- 4) 「学校資料 宝の山消失危機 専門家が研究会」『毎日新聞』2017年8月28日朝刊、「散逸・廃棄進む学校資料」『読売新聞』2020年6月5日朝刊、連載「学校資料どう残す 県内の事例から」(5回)『高知新聞』2019年12月2~6日朝刊など。
- 5) 目良裕昭・楠瀬慶太 2019 「高知県の学校資料を考える会の発足と活動」『地方史研究』405
- 6) 歴史文化資源の「活用」はすぐにできるわけではなく、まずは資料の調査や整理といった「記録」を行い、教職員の方に資料の価値に気付いてもらう「掘り起こし」の過程を経て、資料の保存や継承、授業・展示で活用する「普及」の段階に至るプロセスが必要で、これを「地域再生の歴史学の3段階プロセス」と呼んでいます(楠瀬慶太 2013 「地域再生の歴史学」『地方史活動の再構築』、楠瀬慶太 2020 「地域における歴史文化団体の組織と運営」『地域活性研究』12)。
- 7) 以下、工藤航平 2019 「刊行にあたって」『学校資料の未来』(岩田書院)を整理してまとめました。
- 8) 村野正景 2020 「「学校所在資料」という概念の意義」『資料と公共性 2019年度研究成果年次報告書』
- 9) 和崎光太郎 2019 「学校資料の保存と活用」『学校資料の未来』(岩田書院)
- 10) 大平聰 2020 「地域に眠る学校資料」『日本歴史』857
- 11) 嶋田典人 2019 「学校組織文書と公文書館」『学校資料の未来』(岩田書院)、嶋田典人 2020 「小学校公文書「学校日誌」と香川県立文書館の役割」『香川県立文書館紀要』23などを参照。価値付けをする際の「重要な公文書」として、①生徒指導要録、学校日誌、職員会議録、教育委員会などの収発文書、②学校統廃合・学校再編・学校改革・学区再編に関する文書、③建物取り壊しと新築・改築、校地拡張などに関する文書をあげています。「生活・活動記録」には、④学校だより、学校新聞、運動会プログラム、給食のメニュー表、⑤写真・刊行物、⑥学校要覧、学校周年記念誌などがあります。⑦実業高校の特色のあるもの、⑧門札・バッジ・公印などのオリジナルなモノ資料もあげています。
- 12) 村野正景・和崎光太郎編 2019 『みんなで活かせる!学校資料—学校資料活用ハンドブック』(京都市学校歴史博物館)、村野正景 2020 「学校所在資料の価値体系とその活用」『シンポジウム 学校資料の活用を考える I・II 講演録』(京都歴史文化施設クラスター実行委員会)。
- 13) 主な記述を抜粋して小冊子『旭小学校日誌』にまとめられ、小幡久美子 2004 「高知県における興亞少年隊・少女隊の結成と展開」『土佐史談』227などで研究に活用されています。高知ミモザの会 2013 「学校の記憶と再生—かつて高知県には709の小中学校があった」(リープル出版)には、高知の学校史や学校文集、学校の記憶に関する証言などが収録されています。
- 14) 前掲7)。
- 15) 土佐清水市史編纂委員会 1979・1980 『土佐清水市史』上巻・下巻(土佐清水市)
- 16) 福田仁「そして某年某日④ 土佐清水市旧大津小学校 生徒3人涙の休校 1993年3月24日」『高知新聞』2021年4月27日朝刊
- 17) 高知戦争資料保存ネットワーク編 2021 『森田家文書』『高知県近現代資料集成Ⅰ』地域資料叢書20
- 18) 山田千都留・棚橋美代子 2009 「椋鳩十の『母と子の二十分間読書』運動に関する考察」『京都女子大学発達教育学部紀要』5
- 19) 夏目武子 1996 「戦後児童文学の原点 岩倉政治『空気がなくなる日』、壺井栄『あたたかい右の手』」『文学と教育』172
- 20) 鷺谷花 2001 「切斷と連続：児童文化における<戦前>、<戦中>、<戦後>をめぐる覚書」『文学研究論集』19

【執筆者一覧】

- 21) 岡本浩明 2004 「太平洋戦争以前および終戦直後の日本のまぐろ漁業データの探索」『水産総合研究センター研究報告』
- 22) 高知かつお漁業協同組合「かつお一本釣り漁業について」
(<https://kochi-ryoushi.jp/info/dtl.php?id=535>) 最終閲覧
2021.07.13
- 23) 土佐清水教育研究所・土佐清水市のくらし編集委員会 2011 『土佐清水市のくらし』(土佐清水市教育委員会)
- 24) 土佐清水市史編纂委員会 1979 『土佐清水市史』上巻 (土佐清水市)
- 25) 中村春利 1975 「『土佐清水のくらし』を編集して」『高知地理』1
- 26) 平田健 2017 「考古学・人類学者と学校教材」「まちとミュージアムの文化がむすぶ幸せなかたち 3」(京都府京都文化博物館)
- 27) 楠瀬慶太・渡部淳・目良裕昭・高木翔太 2021 「学校資料による地域史復元」『よど』22
- 28) 日本児童教育振興財団編 2016 『学校教育の戦後 70 年史』(小学館)
- 29) 小山静子 2014 「近代学校教育制度の確立と家族」『岩波講座日本歴史 16』(岩波書店)
- 30) 前掲 27)
- 31) 高木翔太 2020 「学校資料収集の実践と課題—大分県公文書館の経験から—」『シンポジウム高知県の学校資料を考える 記録集』(高知県の学校資料を考える会)
- 32) 公立高の公文書については、高知県公文書等の管理に関する条例(令和 2 年 4 月 1 日施行)により歴史公文書等は高知県立公文書館が収集保存することとなりましたが、条例制定の結果、保存期間が満了した公文書の廃棄も厳密に行われるようになりました。
- 33) 事務的業務を情報システムに集約して電子化し、クラウド上で一元的に管理するシステム。高知県では、令和 2 年(2020)4 月から県と市町村が共通のシステムを導入しました。
- 34) 目良裕昭 2020 「高知県の公立小中学校における文書管理の現状」『シンポジウム高知県の学校資料を考える 記録集』(高知県の学校資料を考える会)
- 35) 嶋田典人 2019 「学校組織文書と公文書館」「学校資料の未来」(岩田書院)
- 36) 和崎光太郎 2017 「学校歴史資料の目録と分類」『京都市学校歴史博物館紀要』6
- 37) 村野正景・和崎光太郎編 2019 『みんなで活かせる! 学校資料―学校資料活用ハンドブック』(京都市学校歴史博物館)には、全国の学校博物館の取り組みや調べ学習、社会科や総合的な学習の時間での学校資料の活用事例などが紹介されています。
- 38) 影山千夏 2020 「追手前高校の学校資料と学校博物館の取り組み」『シンポジウム高知県の学校資料を考える 記録集』(高知県の学校資料を考える会)
- 伊藤嘉高 1984 年生まれ。高知海南史学会会員。
小幡尚 1968 年生まれ。高知大学人文社会科学系人文社会科学部門教授。
影山千夏 1968 年生まれ。特定非営利活動法人地域文化計画理事。
楠瀬慶太 1984 年生まれ。高知新聞社記者。※編集担当
渡田美砂 1996 年生まれ。高知市立自由民権記念館学芸員。
石畠匡基 1988 年生まれ。高知県立歴史民俗資料館学芸員。※編集担当
 笹島康仁 1990 年生まれ。記者、フォトグラファー。元高知新聞社記者。
高木翔太 1987 年生まれ。高知県立高知城歴史博物館学芸員。※編集担当
 田村公利 1965 年生まれ。土佐清水市史編さん室長。※編集担当
 土居喜一郎 1988 年生まれ。高知県立高知国際中学校主幹。※編集担当
 筒井秀一 1956 年生まれ。高知市立自由民権記念館長。
 永野勇太 1998 年生まれ。高知大学教育学部卒業。
 橋本達広 1972 年生まれ。高知中学高等学校教諭。
 渡田実佑 1991 年生まれ。高知市立自由民権記念館学芸員。
 目良裕昭 1976 年生まれ。いの町立枝川小学校主幹。※編集担当
 水松啓太 1998 年生まれ。高知県立高知城歴史博物館学芸員。
 望月良親 1981 年生まれ。高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門講師。
 谷地森秀二 1967 年生まれ。越知町立横倉山自然の森博物館学芸員。
 渡部淳 1962 年生まれ。高知県立高知城歴史博物館長。

※学校資料の調査には、他に由岐直久、吉本工心、武藤清、東近伸、上田正子、西田和啓、弘田之彦、満木多喜子、山田隆子、森口夏季、遠見早稻、早川二三子、柳花統、今井悟、遠藤広光、塙崎裕斗、伊谷行、福田仁、山崎彩香、片岡剛、大保和巳、筒井聰史、山崎徹、宇賀日香里、丸山和暉、大和敦子、斎藤香織、渡邊雄祐、田邊佳久、下村海登、宮本将志、武内文治、原山博敬、武井知香も参加しました。

学校資料を残す・伝える 一小中学校・高校に残る地域資料の世界—

編集・発行	高知県の学校資料を考える会
代表者	目良裕昭
連絡先	meralka@ma.pikara.ne.jp
ホームページ	https://sites.google.com/view/school-archives-kochi
発行日	令和 3 年(2021)10 月 1 日
印刷・製本	ラクスル印刷(東京都)
デザイン	SIBATO

